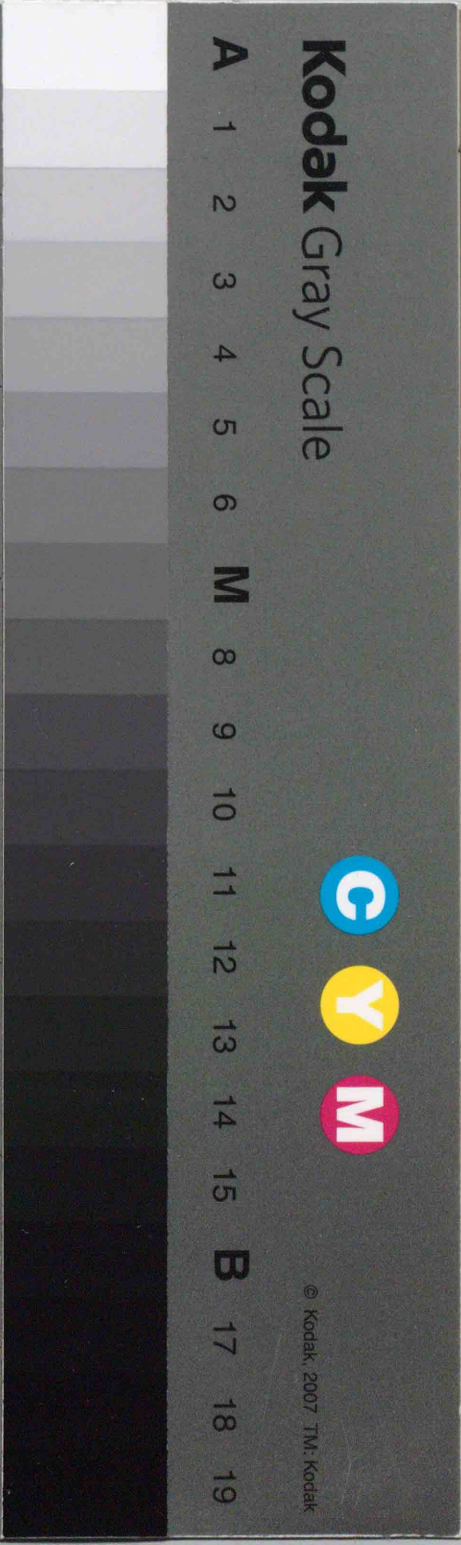
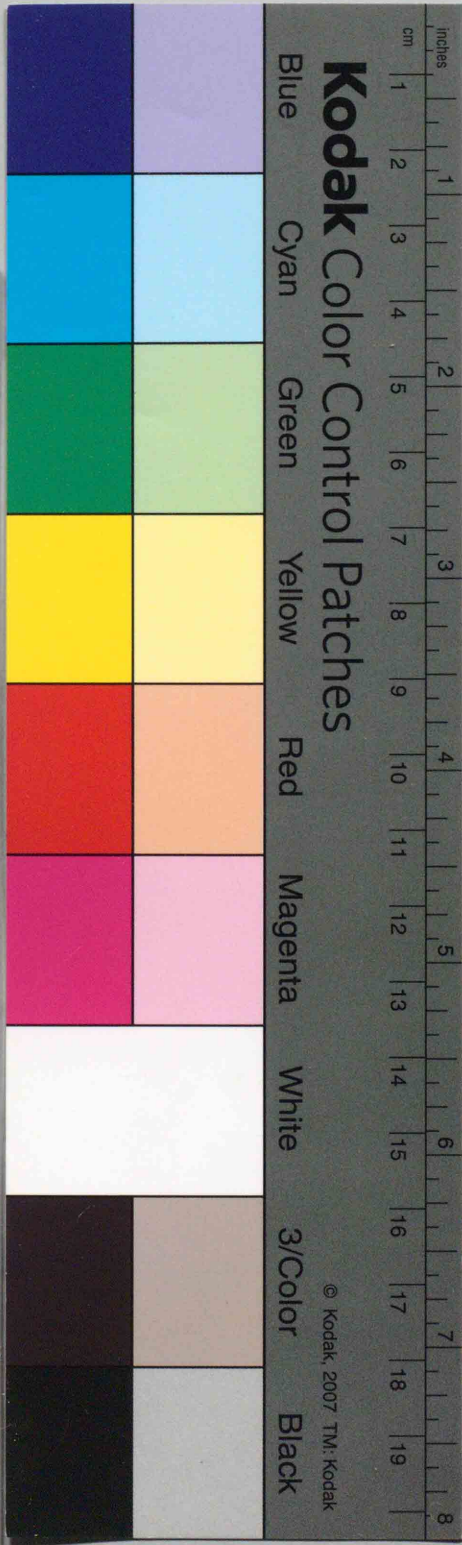


訂修新撰國語讀本 佐々政二編 卷五

3759  
Sa19  
資料室



41503

教科書文庫

4
810
41-1918
200030
1534





3759  
8219

資料室

日六十月一年七正大

濟定檢省部文

用科語國校學中

文學博士佐々政一編

訂修  
新撰  
國語讀本



株式會社明治書院



訂修新撰國語讀本卷五目次

一	文字	一
二	春の曲	八
三	雪月花	一〇
四	人臣の道	一八
五	浮島原の對面	二一
六	源實朝の歌	二五
七	鎮守の森	二六
八	オリンピアの回顧	三一

目次



九	無言上人	三七
一〇	俳句評釋	三八
一一	山紫水明	四四
一二	十國峠の眺望	五二
一三	阿新殿の事上	五六
一四	阿新殿の事下	六二
一五	西郷隆盛に與ふ	七〇
一六	作文容易	七七
一七	讀書の選擇	八三
一八	馬琴日記鈔	八八
一九	思ひ出	九三

二〇	世界の歌枕上	九五
二一	世界の歌枕下	一〇〇
二二	揚子江溯航	一〇七
二三	繪畫の感化	一一五
二四	笠置山	一二二
二五	一萬と箱王	一二七



修訂新撰國語讀本卷五目次終



修訂新撰國語讀本卷五

一 文字

我が國にて普通に用ひる文字には、漢字と和字と假名との三種類がある。

漢字は支那から傳はつたもので、その字體には、古文・篆書・隸書・楷書・行書・草書の六體があるが、普通印刷などに用ひるのは楷書である。然るに等しく楷書といふ中にも、古文・篆・隸より直接に變化し來つた正體の楷書の外に、所謂俗字及び



略字と稱するものがある。例へば、閒・鄰・救・窮・攜・牀・脚はその俗字、邊・澤・聲・亂・實・體・當は正體で、辺・沢・聲・亂・實・體・當は正體で、辺・沢・聲・亂・實・體・當は正體で、辺・沢・聲・亂・實・體・當は正體で、

用せられたるものは、奇古なる正體よりも實用上便利であるが、昔の書物などを讀む爲に、その正體をも知つておく必要がないではない。

その俗字や略字は、勿論支那

の文字の稍變化したるものであるが、和字は全く日本で作つたものである。働・風・風・峠・躰・躰・込・辻などの様に、漢字に倣つ

古文	上	下	左	右
篆書	上	下	左	右
隸書	上	下	左	右
楷書	上	下	左	右
行書	上	下	左	右
草書	上	下	左	右

て新に字形を作つたもの、伽・咄・掙・枉・棒・沖・萩などの様に、漢字にもこの通りの字形はあるが、全く別の意味に用ひたもの、坏・梓・詫・溶などの様に、漢字の一部分を改作して他の意味に用ひたもの、及び腺・哩・吋・糰・疋などの様に、西洋の醫學や數學の入來つてから新に作つたもの、これ等は皆和字である。これ亦一槩に俗字として排斥すべきではない。

假名も亦漢字から出たもので、大凡奈良朝の末から平安朝の前半にかけて、一般に用ひるに至つたものである。平假名は漢字の草體を更に簡易にしたもの、片假名は漢字の偏旁冠などをとつて作つたものであるが、これらは唯、音を表すのみで、意味を表すことはない。これが假名の特色で、その



性質上、漢字や和字よりは寧ろ羅馬字に近いのである。

以上三種類の文字の中で、假名は音を表すのみである、和字は槩して訓のみで、音はない。然るに漢字には音と訓との二様の読み方があつて、その音にも訓にも様様の種類がある。

先づ音に就て言ふと、行狀・行李・行燈・經文・經書・看經・京都・京師・南京の行・經・京の如きは、それぞれ違つた音で讀まねばならぬ。その行狀・經文・京都の類は所謂吳音で、日本に最も早く傳はつた爲に、佛敎に關する語や普通語に頗る廣く用ひられてゐる。行李・經書・京師の類は所謂漢音で、唐の文化が盛に輸入せられた時代に、朝廷の獎勵によつて流布したもので

あつて、儒書は多くこれを用ひて讀むことになつて居る。行燈・看經・南京の類は宋以後に傳はつた音で、唐音と稱してゐるが、唐時代の音といふ事ではなくて、ただ唐土の音といふ意である。但しこの種類の音は極めて稀に用ひられるのみである。この外に、北京・廣東・上海などの如く、現代の支那音を用ひることもあるが、これは唯本邦と交通の頻繁な土地の名などに、僅かに用ひられるのみである。

この唐音や現代の支那音も、かの地の發音に比べると、既に幾分か訛つてゐるのである。吳音は支那の南方の音、漢音は北方長安の音を傳へたものではあるが、原音のままではなくて、餘程變化してゐるのである。



(一) Tunne  
(二) Match.  
(三) Pump.

葡萄牙語。

訓にも種類の種類がある。漢字一字に國訓を附したものの、例へば日月山川草木の類。漢字二字の熟語に國訓を附したものの、例へば從弟伯母海苔所以の類。或はこれに外來語の訓を附したる隧道燐寸唧筒麪包的類。これ等は皆漢字本來の意義に従つて訓讀するものであるから、正訓といふ。然るに草臥七夕團扇流石に五月蠅しの如き訓は、漢字本來の意義とは多少違つてゐるが、相似たところがあるから、これを當てたのであつて、かかる種類のものを意訓といふ。

漢字には以上の如く種類なる讀方がある。されば今或漢字を讀む時に、これを音讀すべきか、訓讀すべきか、或は如何なる音、如何なる訓にて讀むべきか、頗る疑はしい場合もな

いではないが、大抵は國語の習慣や前後の關係や送假名等によつて判定することが出来る。その中で漢語で出來た熟字は、音讀する時は二字ともに音讀し、訓讀する時は二字ともに訓讀するのが正則である。但し國語と漢語と連合して熟字となる時は、敷地奥行の如く音訓を交へて讀むことがある。又正則ではないが、重箱合羽團子出立のやうに、音の下に訓を連ねて讀むこともあり、湯桶小僧身分のやうに、訓の下に音を連ねて讀むこともある。

これを要するに、言語文字のことは、一に慣例によつて定まるもので、久しき習慣のあるものは、正則でないものでも亦これに従はねばならぬ。



二 春の曲

うてや、つづみの春の曲。  
雪にうもるる冬の日の  
かなしき夢はとざされて、  
世は春の日とかはりけり。  
ひくや濃染の春霞、  
かすみの幕をうちはへて、  
花と花とをぬふ絲は  
はや萌出でしあをやなぎ。

霞のまくをひきあげて、  
春をうかがふことなかれ。  
花咲きにほふ蔭をこそ  
春の臺といふべけれ。  
胡蝶よ、花にたはぶれて、  
優しき夢を見ては舞ひ、  
酔うて羽袖もひらひらと、  
春の姿を舞ひねかし。



緑のはねのうぐひすよ、

梅の花笠ぬひ添へて、

夢靜かなる春の日の

しらべを高く歌へかし。(島崎藤村―若菜集)

### 三 雪月花

煌煌たる活動の日の光、西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照す。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫赫として仰いで見ることも出来ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば、羣陰皆影を伏して、大小の有象無象悉く照破されるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴

賤・貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴はない清冷の光である、皎潔・無垢崇美と稱ふべき、やさしい光である。休息・安靜の夜には最もふさはしい。この光に對しては、誰しも人生の慰藉を感ずる、詩的情緒は油然として涌く。晝の間は猛獸と鬪つて居る熱帯の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱帯の椰子の影、寒地の氷の家、眺める人の心、心は違ふであらうが、隈なく世界を照す月光の人の智懷にしみ渡ることは、恰もその影の、千草の露の玉毎に宿るやうなものである。<sup>\*</sup>うちむかふ月は一つの影ながら、うかぶはちぢの思なりけり<sup>\*</sup>である。

<sup>\*</sup>荷田蒼生子の歌。



東西古今、悲喜哀歡の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。これを嗟歎し、これを吟詠した。詩歌の感吟は、世界各國の言語に充ち満ちて居る。天文學者は云ふ、「月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である」と。この冷い光が、古往今來どれ程の暖かみを人間に與へたか、又現に與へてゐるか。月は永久に人間の良友である。

雪は月よりも一層冷い。貧富貴賤の差別なく、その純潔の色をもつて乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓茅屋も皆同じ色に埋められる。花ならば咲かぬ梢もまじらまし、なべて雪降るみ吉野の山(三)といふやうに、眼に入るもの、悉くその下に包まれてしまふ。(三)三千世界銀成色、十二樓臺

(三)新編古今集、僧仙覺の歌。

(三)白樂天の詩句。

玉作層の美觀は一切の人間界の醜を掩ひ去つて人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白な色に比べては、地上の花も甚しく汚く感ぜられるのである。霏霏と散り、紛紛と飛んで、唯一條の川水を殘して、山といはず、野といはず、またたく中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉色色のながめはもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新緑の色も目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡したものではな



いか。一年中、蓮の花の開いて居る極樂浄土は、決して我等の世界程楽しいものではなからう。雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさまざま、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲亂れるのは、人生としてはあまりに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、かうばしい匂さへ有つて居る。我等の食用の爲に作つた菜や大根の花でも、無限の詩趣を具へて居る。富貴の庭園に培ふ花の價を生じたのは無理はないが、山の花、野の花、いづれも月や雪と同じ様に、一文錢を要せぬのである。人世に花なくんば、どれほど寂寞を感ず

\*年ふれば齡は老いぬ、しかはあれど、花をし見ればもの思もなし。(古今集、藤原良房)

るであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、牀の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を慎んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。人は死んでも花を忘れぬのである。月雪の眺は、その皎潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその豔麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ花やか花花し華美華麗華奢等の語はみな花に基いた語である。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚である。余はただ花をし見ればもの思もなしといふ古歌を以て、總てを總括し得べしと信ずる。

月雪花三つのながめは各、その特長がある。いづれを前、いづれを後といふことが出来ぬ。



(一) 新古今集、康資  
王母の歌。

(二) 古今集、清原深  
養父の歌。

(三) 謠曲、葛城の句。

山櫻花の下風吹きにけり、

木のもとごとの雪のむらぎえ。

これは花を雪にたとへたのである。

冬ながら空より花のちりくるは、

雲のあなたは春にやあるらむ。

これは雪を花にたとへたのである。

笠は重し、吳山の雪靴はかんばし、楚地の花。肩上の笠に

は無影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とにたとへたのである。花を賞して月を

愛せぬ人は無い。月花を愛して雪を賞せぬ人も無い。

思へば、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中

(四) Iceland.

冰雪に鎖されてゐるアイスランドでは、氷は即ち人の家である。この地方の人には、寸紅の目を楽しましめるものも無い。又これに反して、全く冰雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帯の住民は、瓊玉を綴る奇観は見たことがない。瓦斯電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華な倫敦の住民も、秋冬の半年は、美しい月の光を見ることが出来ない。我等日本人が、昔も今もこの三つの眺を撞にすることを得るのは、眞に天賦の幸福ではあるまいか。

月雪花の眺は、古人の歴史が加はつて一層の感興が増す。世世を経て詠めし人の數にまた、我をもゆるせ秋の夜の月。月は古來の歴史を照す鏡である。年年歳歳花相似、歳歳年年

(五) 伊藤仁齋の歌。  
(六) 唐劉廷芝の代下  
悲白頭翁上の  
詩中の句。



人不同。人生の感は花を見てますます繁く、雪を見ていよいよ多し。二千五百年以來、月・雪花三つの眺を有し得たる我等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を我等に傳へたるよ、如何に多くの追慕を我等に催さしむるよ。(芳賀矢一「月雪花」)

#### 四 人臣の道

凡そ王土に生れて、忠を致し、身を捨つるは人臣の道なり、必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども後の人を勵まし、その跡をあはれびて賞せらるるは君の御政なり、下としてきほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功もなくして過分の望をいたすこと、みづから危むるは

しなれど、前車の轍をみることはまことにあり難き習なり

けむかし。

中古までも人のさの

北み豪強なるをばいまし

島められき。豪強になりぬ

親れば、必ず驕る心あり。果

房して身を亡ぼし、家を失

ふためしあれば、誠めら

るも理なり。鳥羽院の

御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することとどむべしといふ制符度度ありき。源平久しく武をとりて仕へしか





ども、事ある時は宣旨をたまはりて、諸國の兵をめしぐしけるに、近代となりては、やがてかたらはるるやから多くなりしによりて、この制符は下されき。果して今迄の亂世の基なれば、いひ甲斐なきことになりけり。

このころよりの諺には、一度軍にかけあひ、或は家子・郎從節に死ぬるたぐひもあれば、わが功におきては日本國を給へ。もしは半國を給はりても足るべからず。など申すめり。まことにさまで思ふ事はあらじなれど、やがてこれより亂るるはしともなり、又朝威のかるがろしさも推量らるるものなり。言語は君子の樞機なり。といへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬことにこそ。さきに記

孔子の語。

し侍りし如く、堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣・賊子といふものは、そのはじめ心言葉をつつしまざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光のかはるにもあらず、草木の色の改まるにもあらず、人の心の悪しくなりゆくを末世といふにや。(北畠親房―神皇正統記)

### 五 浮島原の對面

佐殿は善惡に騒がぬ人にておはしけるが、今度はことの外嬉しげにて、さらばこれへおはしまし候へ。見參せむ。と宣へば、彌太郎やがて參り、御曹司にこの由を申す。御曹司大きによるこび、急ぎ參り給ふ。佐殿つくづくとこれを御覽じて、

駿河國駿東郡愛鷹山の裾なる須戸沼附近の原野。源賴朝。

源義經。



左馬頭源義朝。

平清盛の繼母。

まづ涙にむせび給へば、御曹司も共に聲を吞みて泣き給ふ。互に心のゆくほど泣きて後、佐殿涙をおさへて、<sup>三</sup>「さても頭の殿におくれ奉りて、その後御ゆくへを承り候はず。幼少におはし候時、見奉りしばかりなり。頼朝池の尼の宥められしによりて、伊豆の配所にて伊東北條に守護せられ、心にまかせぬ身にて候ひしほどに、奥州へ御下向の由は幽かに承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありと御忘れ候はで、とりあへず御上り候こと、申しつくしがたく悦び入り候。これ御覽候へ、かかる大事をこそ思ひ企てて候へ。八箇國の人人を始として候へども、皆他人なれば、身の一大事を申しあはする人もなし。平家の討手のぼせばやと思へども、身

源義家、<sup>三</sup>源義光、<sup>四</sup>

は一人なり、頼朝自身すすみ候へば、東國おぼつかなし。代官をのぼせむとすれば、心やすき兄弟もなし。他人をのぼせむとすれば、平家と一つになりて、卻て東國をや攻めむと存ずる間、それもかなひがたかりしに、今御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭殿の蘇らせ給ひたるやうにこそ思ひ候へ。吾等が先祖八幡殿の、後三年の合戦に、舍弟刑部丞と一つになりて、遂に奥州を従へ給ひける時の御心も、頼朝が只今の心にかでかまさるべき。今日より後は魚と水との如くにして、先祖の恥をすすぎ、亡魂の憤を息めむと宣ひもあへず、涙を流し給ひけり。御曹司はとかくの返事もなくして、袂をぞしぼられける。これを見て、大名小名互の御心おしはかりて、皆



袖をぞぬらしける。

しばらくありて御曹司申されけるは、仰のごとく、幼少の時、御目にかかりて候ひけるやらむ。配所へ御下りの後は、義經も山科(二)に候ひしが、七歳の時鞍馬(三)へ参りて、十六までかたの如く學問を仕り、さては京都に候ひしが、内内、平家方便をつくるよし承り候間、奥州に下向仕りて、秀衡を頼み候ひつるが、御旗揚の由承りて、取りあへず馳参る。今は君を見奉り候へば、故頭殿の御見参に入り候こちしてこそ候へ。身をば君に進らする上は、いかが仰に従ひ参らせては候べき」と申しもあへず、また涙を流し給ひけるこそあはれなれ。さてこそこの御曹司を大將軍にてのぼせ給ひけれ。(義經記)

(二)山城國宇治郡。  
(三)同國愛宕郡。

(三)鎌倉の三代將軍。  
(二)八五十一(七九)

六 源實朝の歌

この寐ぬる朝けの風にかをるなり、  
軒端の梅の春のはつはな。



源實朝筆蹟

春雨はいたくな降りそ、旅人の  
道行衣ぬれもこそすれ。  
箱根路を我が越えくれば、伊豆の海や  
沖の小島になみのよる見ゆ。



大海の磯もとどろによるなみの  
われて碎けて裂けてちるかも。

山は裂け、海はあせなむ世なりとも、

君に二心わがあらめやも。

武士の矢なみつくらふこての上に

霰たばしる那須の篠原。

葵草かつらにかけて、千早振る

加茂の祭をねるは誰が子ぞ。

(二) 下野國那須郡那須野が原。

(三) 山城國愛宕郡加茂神社の葵祭。

### 七 鎮守の森

満目蕭條として田も畠も霜枯の風情見るかげもなき間

に、一むらこんもりとして緑鬱葱たるものは鎮守の森なり。金も石も燦けむばかりの夏の眞晝中に、一陣の涼風殿角より起りて、社前の注連繩さらさらと鳴れば、ここは子守・田夫等の安樂世界となりて、拜殿に晝寐の夢は圓かなり。春のあしたには、祠前一二株の彼岸櫻咲きこぼれて、一村に花信を傳へ、秋のゆふべには、社後の蔦蘿、紅を染めて、夕日の色もまばゆし。花朧なる曉、月明き夜、松・杉暗くして、瑞籬のほとり神さびたり。詩趣獨りここに饒かにして、何事のおはしますかは知らねども、神神しく覺ゆるなり。日落ちて月漸く上る時、涼を趁ふ村人の影婆娑として、鎮守の森は舞蹈場と化するなり。祠頭の旗幟翩翩として風に

(三) 何事のおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる。(西行法師)



靡く時、滿村の老幼織るが如く、鎮守の祭禮は一歳中、復と得がたき歡樂なり。年豊かなれば詣り謝し、天旱すれば雨を乞ふ。洵に鎮守の森は一村の望をあつめ、一郷の中心として神聖なる、しかも面白き所たるなり。

かかる鎮守の森にいます神は、多くはその土地、その土著の民と何等かの關係あり。溯つてこれを考ふれば、氏族・部民がその祖先を祀りたるものも少なからず。諸國に鎮座し給ふ神社は、畢竟鎮守の森の大いなるものなり。鹿島(二)・香取(三)の神宮は、經津主神・武甕槌神の子孫が創めたる所にして、宇都宮(三)二荒神社は、毛野君の一族がその祖先を祀れる所なるべし。その一層大いなるものには、出雲大社あり。その最も大いに

(一) 國幣大社、常陸國鹿島町。  
(二) 官幣大社、下總國香取町。  
(三) 國幣中社、下野國宇都宮市。

して日本の鎮守たるものには、五十鈴川の上に宮柱太しく高き伊勢大神宮もあらせ給ふなり。

これを小にしては一村の中心にして、これを大にすれば帝國の中心たり。祖先の神靈、前賢の精魂は長へに鎮守の社に留まりて、子孫・後人の精神に通ひ、彼等をして奮勵自進せしむべし。天祐神助の信仰は勇氣鼓舞の最良法なり。しかも信仰とは權道にあらず、方便にあらずして、直に神に接し、靈に感ずる唯一の法なり。

祖先崇拜なるかな。これ獨り原始の觀念のみにあらず。祖先の勳功は後人奮勵の料たり、子孫の名譽心を發揮すべき興奮劑たり。ただその崇拜をして保守的たらしむる勿れ、回



願的たらしむる勿れ。進歩的たらしめざるべからず、自覺的たらしめざるべからず。

ここに於てか鎮守の森をして、一層一村一郷の中心たるの實あらしむべきなり。森をして更に神さびて靈の窟屋たるに適せしむべきなり。これが爲には苗樹を植ゑ、草萊を去り、祠宇を修め、園池を美にすべし。一村一郷の崇敬地たらしめ、遊樂地たらしめ、集會所たらしめ、心なき田夫にも美の觀念を與ふる所、村人の誇とする所、他郷に在りても猶戀戀の思あるべき所たらしむべし。小學兒童の運動會もこれを中心としてこの附近に行はしむべし。小やかなる村落圖書館の如きもこのほとりに設けらるれば最も妙なるべし。鎮守

の森をして一村一郷の中心たるの實あらしむるは、蓋し風化の上に得る所極めて大いなるものあらむ。(笹川臨風)

### 八 オリンピアの回顧

(一) Olympia. ウスベロポンスのアルフエサ  
(二) Zeus.  
(三) Cyrene.  
(四) Syracuse.  
オリンピアのゼウス神は希臘全土の信仰を得た神である。四年に一度の祭日には、南は亞弗利加のシリオン、西は伊太利のシラキュース、東は小亞細亞のあたりまで、苟も希臘人の住んだ處からは、幾千幾萬の人人が集ひ來たのである。オリンピアの廢墟の奥に、一部分のみ發掘された演技場の址は、彼等が一世の晴の場所であつた。今はその入口に蔦かづら高く繁り合つて、羅馬時代に建てた凱旋門の半ば壞れ



たるに纏はつてゐるのが、如何にも名譽の月桂冠であるかのやうである。

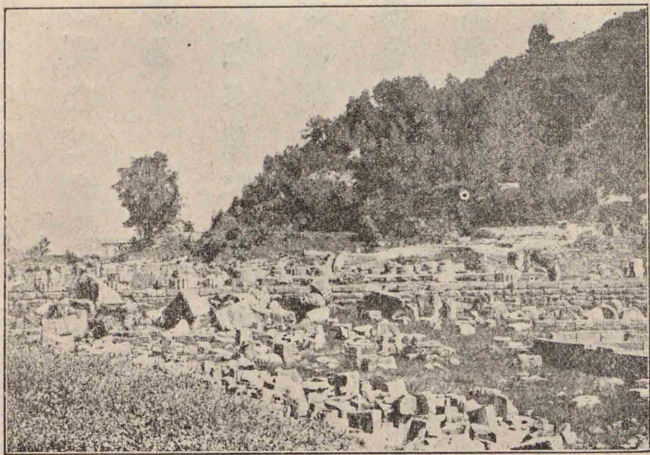
この大演技は四年ごとの大祭日に催された。此の日は神聖なる平和の日として、希臘全土の人人が敵身方を忘れて、これに列したのである。希臘全土の一致結合は、このオリンピアの演技によつて出来たといふも過言ではない。國民全體が面白く愉快にここに集まり、各州の選士が雲を呼び風を起して、龍虎相搏つたのは、如何に壯快に且つ目覺しかつた事であらう。

(一) Herodotus.  
(-B.C.460?)  
(二) Demosthenes.  
(B.C.484?-424?)

集まつて來た人人の中には、詩人もあつたであらう。學者もあつたであらう。ヘロドトスの如き歴史家もデモステ子

(三) Themistocles.  
(B.C. 335?-322)

スの如き雄辯家も、テミストクレスの如き勇將も、さては政



址 舊 ア ピ ン リ オ

事家、法律家、富めるも、貧しきも、名門も、平民も、あらゆる階級、あらゆる職業の人人が互に顔をあはせ談笑周旋、この閒を徘徊した様の、如何に面白く且つ賑かであつたらうか。

若しここに名工があつたとせよ。彼の靈腕はこの羣集によつて得る所がなかつたであらうか。人生を研究する好機、人間を捕ふる機會は、彼等の決し



(一) Persia.

て逸しなかつた所であらう。想ふにこの演技は單に演技そのものの進歩のみを來したのではない。哲學・歴史・戯曲・音樂彫刻などの發達に影響したことも尠少ではなかつたのである。

この祭には市場が立つ事になつて居た。物資の交換・賣買が如何に全國の商業・農業を益したことであらう。かくて思想・知識の交換延いては感情の融和が國民の一致に暗暗裏に貢獻する所があつたと同時に、商工業等にも影響したものが多かつたのである。彼等はペルシア戦争に於て、國民的敵愾心の絶頂に達した。此の時、小忿を忘れて大敵に當り、よく東方の強を挫くことが出來たのは、このオリンピックの演

(二) Motto.

技に負ふ所が少なくなかつたと思ふ。

しかもその演技者は決して職業的の者でなかつた。ただ各州から出た青年選士であつた。そして羅馬時代に入つて職業的となつた時は、この演技のはや衰へ始めた目であつた。この演技の精神は、全國民をして眞の勇者たらしむるにあつて、全國民の體格意志の發達は、この演技によつて益助成せられた。古代希臘に於ける教育のモットーは一言にて盡く、曰く、健全なる肉體には健全なる精神宿る。これである。ただこの健全なる精神を養成せむため、健全なる肉體を作るに苦心したのである。希臘の彫刻にはこの意味が現れて居る、希臘の文學にもこの意味が見えて居る。



(一) Base-ball.  
(二) Foot-ball.

オリンピックの祭典は、かくて希臘の歴史はじまつて以來、永く國民的祭典として羅馬時代まで連續した。その事蹟は希臘の文化と共に、永久に亡びることがないであらう。我が國には、このオリンピック演技のやうなものは無用のことであらうか。我が固有の武術にせよ、各學校のベースボールにせよ、フットボールにせよ、素人相撲にせよ、各階級を通じ、各地方を通じ、舉つてその選士を出して、龍攘虎撃の壯快なる競技を演ぜしめ、之を觀る者もまた全國到る處から雲集する事の出來る一の演技場の無いのは、盛世の一大遺憾ではなからうか。余偶、オリンピックに遊び、雷雨を衝いてゼウス神殿の廢墟に詣で、雜草藜藜たる演技場を徘徊して、古希臘の

文化が淵源する所ここに在りと想到したとき、余の心耳に聒く天來の聲があつた。それは「我が國民の崇敬し、信仰する伊勢神宮に一大演技場を建て、その大祭日に全國民の競技を演ぜしめよ」といふのであつた。(黑板勝美)

### 九 無言上人

或山寺に四人の上人ありけり。眞如の離言を觀じ、淨名の杜口を學ばむとや思ひけむ、契を結びて道場を莊嚴にし、萬縁をやめ、三業をしづめて道場に入り、四人座を並べて七日の無言を始む。承仕一人ぞ出て入りしける。ここに、更たけ夜ふけて、燈の消えむとするを見て、下座の僧承仕火かきあげ



よ」といふ。竝びの座の僧、無言道場に物申すやう候はず」といふ。第二座の僧、二人共に物いふこと、餘りに心地悪しく覺えて、物にくるひたまふな」といふ。上座の老僧、様はかはれども、面面に物いふことあさましく、もどかしく覺えて、法師ばかりぞ物は申さぬ」といひて、打ちうなづく。かしこげにて、殊に嗚呼がましくこそ覺ゆれ。此の事を思ひとけば、人ごとに此の風情のがれがたし。(沙石集)

一〇 俳句評釋

俳句の妙味は終に説明すべからず。されど字句の解釋はさまで難きにあらず。今、初學のために二三の古句を解説し、

併せて多少の批評をなすべし。

何事ぞ、花見る人の長刀。

去 來

長刀をさしたる人の花見に出かけたるを咎めたるなり。花見とならば、いかめしき長刀をさして、羣集の中へ出づるにも及ぶまじきに、その無風流は何事ぞと嘲りたるなり。これらは多少の理窟を含みをる故に、俗閒に傳はり稱せらるれども、名句といふは必ずしもこの種の句に限らざるなり。

蒲團著て寝たる姿や、東山。

嵐 雪

これは、實景を知らぬ人にはその味を解し難し。試に京都に行きて、つくづくと東山を見るべし。低き山の近くに在りて、しかも頂の少しづつ高低ある處、恰も人が蒲團を被りて

(芭蕉の高弟、向井氏。(二二二—二三六)

(芭蕉の高弟、服部氏。(二四—二五七)



寢たるに似たり。さればこそこの譬喩的の吟ありたるなれ。品のよき句にはあらねど、滑稽と輕妙とを以て勝りたるものにて、容易に摹倣し得べからず。又この句につきては多くの人の氣づかざる特色あり、そは冬の季といふことなり。さすがの都も冬枯れて、見るものとして淋しく寒からぬはなきが中に、かの東山を見れば、これも春頃のなまめきたる様を失ひて、唯ひつそりと寒さうに横はる處、蒲團うち被りて寢たると見れば、淋しさの中に多少のをかしみもありて、何となく面白う感ぜらるるなり。

芭蕉の高弟、榎本氏。(三三三—三六七)

わが雪と思へば輕し、傘の上。

其角

普通には、我がものとおもへば輕し、傘の雪として傳はれ

り。されど、「我がもの」としては甚だ俗なり。わが雪の方に従ふべし。意味は解釋するまでもなし、この句、斬新を以て賞すべし。若しこれを摹倣する者あらば、直に邪路に陥ること必定なり。

芭蕉の高弟、内藤氏。(三三三—三三六)

わが事と泥鰯の逃げし根芹かな。

丈艸

芹は春のはじめのものなり。芹摘にと手を出したれば、芹のあたりに居たる泥鰯の捕へられむとや恐れけむ、あちらに逃げ隠れたりといふ意にて、泥鰯を擬人にして輕くおどけたる處、丈艸の擅場なり。

嵐雪の孫弟、大島氏。(三七六—四七)

世の中は三日見ぬ間に櫻かな。

蓼太

名高き句にて、世の人大方は知れり。誰にもわかる句にし



て、しかも理窟を含みたれば、世人には賞翫せらる。されど理窟を含みたるもの必ず善くはあらず。この句、格調頗る下品なり。俗には「三日見ぬ閒の」と傳へたれども、矢張「見ぬ閒に」の方よろし。の」とすれば、全く譬喩となりて味少なく、「に」とすれば「櫻」が主となりて實景となる故に、多少の趣を生ずべし。

菊の香や、奈良には古き佛たち。

芭蕉

この句に於て、菊と佛とは場所の關係なし。必ずしも佛の前に菊を供へたるにもあらず、必ずしも佛堂の傍に菊の咲きたるにもあらず、強ひて場所の關係をいはば、菊も古佛も共に奈良にあるまでの事なり。作者の奈良に遊びし時、恰も菊の咲く頃なりしなるべく、従つてこの句を以て奈良をあ

らはしたるなるべしと雖も、菊花と古佛との取合せは、共にさび盡したる處、少しも動かぬやうに見ゆ。ここ作者の活眼といふべし。

時鳥鳴くや、雲雀の十文字。

去來

時鳥は夏にして、雲雀は春なり。時鳥は春に鳴かざれども、雲雀は夏も居るゆゑ、この句は夏季となるなり。時鳥は横一文字に飛ぶものにして、雲雀は下より上へ眞直に上るものなり。故に丁度、雲雀の上る處を時鳥が横ぎりて、恰も十文字の如くなりたるをいへり。最も巧なる句なり。

(正岡子規「俳諧大要」)



一一 山紫水明

山紫水明の語はよく京都の景色をいひ表せり。何處の山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむるものなるを知らば、三面を山にして土地濕潤、水分を含むこと殊に濃かなる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明かなるべし。

嘗て一夏を北陸の海岸に送りしことありき。一日驟雨の至るを見る。疾風さと吹き、浪俄かに高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうちに重なり重なりて海を覆ふ。波の音は雲の中にあり、電光閃閃、磨る墨の雲間に火花を散す。波か雷か。世界はただ一暗黒の中に没し去るかと思はれて、凄じかりき。か

くの如き壯絶なる景は、わが數年の滯留中、遂に京都にては見ることを得ざりき。

されど下京より吉田に通ひたる朝な朝なの景色の、今にも恍惚として眼前にあるを覺ゆ。ひき渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の、一つ一つ彼方へ彼方へと薄くなりて、向ふに寢蒲團著て寝たるたる東山は、あるかなきかの夢よりいまだ覺めやらす。吉田の岡に並び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く薄く、花賣る少女の姿は隠れて、聲ぞまづ朝靄に漏來る。時雨の景色のまたよその國には見られぬ様よ。愛宕の峯を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、はらはらと面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて直に東山を包み、いつしかそ

\*蒲團著て寝たる  
姿や、東山。(風  
雪)



れも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かかるやさしき景色は山河襟帯の平安京の特色なり。

等しく温帯の地なりといへども、大陸の内部は、寒氣凜凜たる冬期は、直に烈日赫赫たる夏期となり、氣候激變して、その間に和煦の時季を見ず、海岸は温暖なるところ多きかはりに、年中春の如く、秋の如くにして、夏冬の峻酷なる風物を感じず。四季交代の順序の明かなること、わが國の如きは少なく、わが國にしても花も紅葉もなき浦曲などは、到底京都の四季のながめの面白きにしかず。

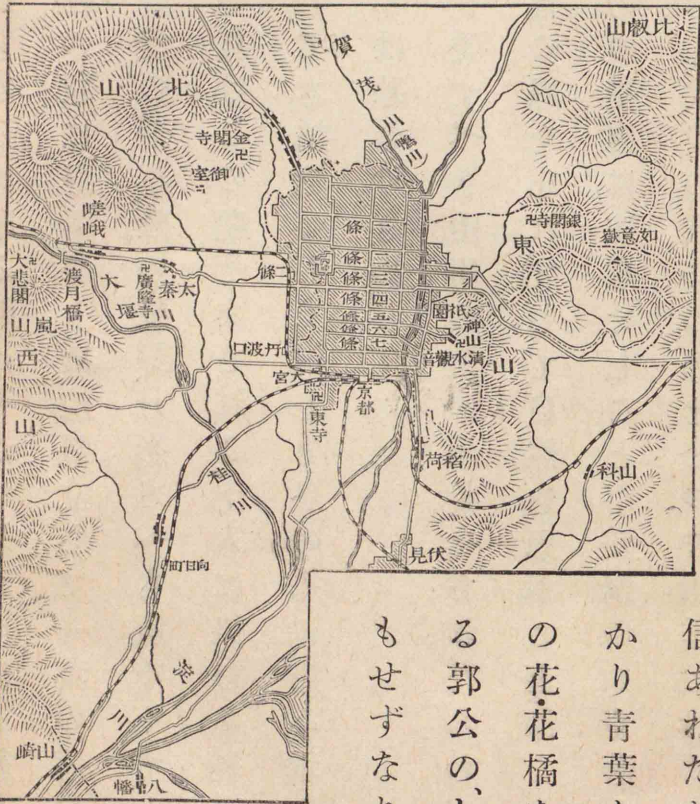
春立つと思ふばかりに四方の山山霞こめ、空の色、水の色さへ昨日に變りて覺ゆ。若菜つみ、小松曳くも新しき年のし

見渡せば花も紅葉もなかりけり  
浦の苫屋の秋の夕ぐれ。(新古今集、藤原定家)  
春立つといふばかりにや、みよしの山も霞みて、けさはみゆらむ。(拾遺集、壬生忠岑)

るしなり。梅の花散りて鶯老を啼けば、柳の緑、桃の紅花の音

信あわただしく、夢かとかかり青葉となりぬ。垣の卵の花、花橋を過ぎがてにする郭公の、しばらくして聲もせずなりぬるは、時知りぬるぞわけてめでたき。五月

雨に軒の玉水  
ひまなく、公事  
物詣も途絶え



山紫水明



六月晦日に行ふ  
大祓。

がちなるに、晴るればやがて暑さの凌ぎ難き、それも一時、夏越の祓に夏も終りぬ。涼風立ちて一葉の落つるに秋を知り、野邊の千草、蟲の聲、月影さへも隈なくて、とりどりなる物の哀はこの頃ぞまされる。千人に染むる紅葉を秋の名残として、木枯騒がしく、淋しき冬の霜に痛み、雪に慰みて、早くも年は暮れゆきぬ。

愛すべき山川の懷に涵養せられたるわが國民は、永く薰育の恩を忘れずして、自然を思ふこと深く、わけて四季の景物の變遷に注意せしこと平安朝の如く著しきはあらざるべし。代代の撰集の部を分つや、四季は最も重んぜられたり。花や、月や、その折折毎に合奏、歌合は絶えず。この時代より盛

白馬(三)正月七日  
上巳(三)三月三日  
端午(三)五月五日  
七夕(三)七月七日  
重陽(三)九月九日

なりし五節句も、起源は多く支那にあるべしといへども、よく國風に融化し、またよく季節に調和したる遊樂なり。白馬(三)の節會は勇ましく、神神しく、曲水の宴の上巳の節となりたるもやさしく、端午は第一に盛にして、淀野にひきし菖蒲の根を競ひ、軒に蓬を葺けば、藥玉(三)の簾にかかりたるも興あり。七夕の空澄みわたる頃、銀河を隔つる二星を仰ぎて、鵲の渡せる橋をおもひ、重陽には菊花の秋に驕れるを愛して、吟詠夜を覺えず。近世に至りて、算盤弾く丁稚、剃刀片手の下剃までが、「梅咲くや」「初雪や」など首をひねりしは、自然を愛する國民固有の本性の然らしめたるなりとはいへ、また一は、千年以來の祖先が折折の景色に愉悅せし結果なりといはざる



べからず。

社會の進歩するに従うて、人工を以て自然に反抗する力は増加す、これやがて文化の恩澤なり。今日開明の民は、煉瓦の家屋風もすかさず、室内の煖爐春長へなれば、何處にか北風のすさぶを知らむ。夏は山地綠蔭深き處、海岸風涼しき處に暑さを避く。都會の住居軒たち續きては、月の盈ち虧け、星影の動くも氣づかず。たとへば東京の子供の、山といへば飛鳥山の外を知らず、杉はと聞けば削れる板とのみ思へる類多し。

平安朝の京都はいまだかくの如く人口稠密ならず、文化進歩せず。従うてその住民も人爲の力を以て自然を左右せ

むとするほどの欲望を有せずして、卻て山川の美に憧憬せる本性は、飽くまでこれに同化せむと試み、服飾の色彩、第宅庭園の配置、一に自然を模範に取る。平安人士の行動の、いかに美はしく平安京の山紫水明と融和して、天人相映發せるかを見よ。人力を能ふかぎり活動せしめ、鬼神を役して自然を己が用に供せしむるは、かれの事にあらず。自然は人間に近づかずして、人間は自然に近づけり。かれらは工業を知らず、科學を知らず、人力の偉大なるを知らず、ただ自然に屈從せり。屈從するにあらず、愛著せるなり。その愛著せるや、勞動に餘念なき蟻の如くならずして、青天の下に吟哦する雲雀の如し。月卿雲客、生活の苦痛を知らず、運輸の便に乏しき京



都の地勢にも不足を感じず、ただ景色の美にあこがれて、鳥兔匆匆四百年、政治の實力はいつしか出でて關東に去りぬ。京都是實務の地にあらずして風流の地なり。平安朝は實務の時代にあらずして風流の時代なりき。

(藤岡東圃—國文學全史)

伊豆國。

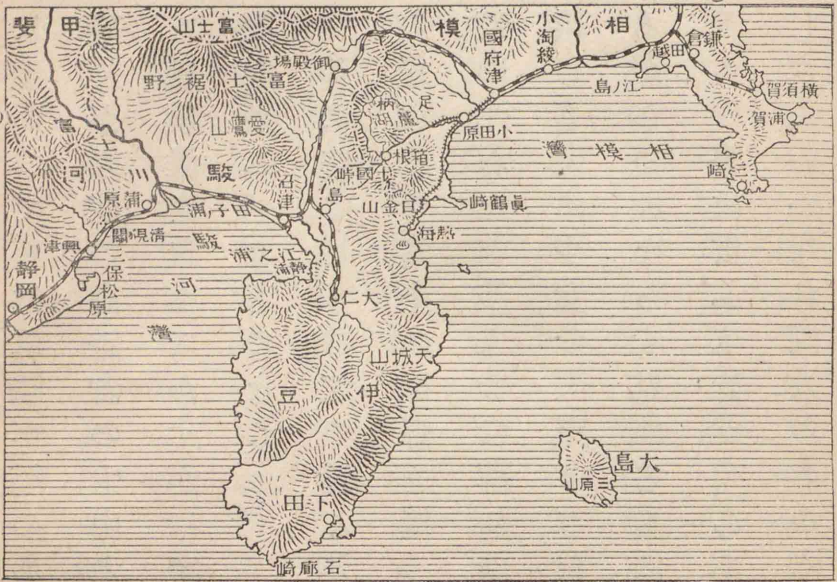
伊豆・相模・武藏・安房・上總・下總・遠江・駿河・信濃・甲斐・大島・三宅島等。  
姊崎嘲風。

一一 十國峠の眺望

十國峠の登臨は記念すべき壯快の遊なりき。この峠は、函嶺より天城につらなる、所謂富士火山脈の一峯にて、頂にのぼれば、關の東西より豆州の沖かけて、十國・五島を眺め得べしとぞいふなる。ある日の空晴れわたりたるに、われ嘲風と

ここに遊びき。

山の頂は熱海より五十町を出でざれば、いと高しとは言ひがたし。されど相駿二州に跨がりて、北は足柄箱根・富士、南は天城神子より、大島・三宅の山山を望み、西は江の浦・静浦を眼下に見おろし、名にしおふ田子の浦づたひに、清見が關より三保の松原かけて、遙かに遠江なる御前が崎





に至るまで、東は眞鶴が崎のあなた、小田原・國府津・小洵綾の磯邊、かの江の島・鎌倉の山山より、田越・三崎のはてに至るまで、相模灘を包みて、かすかに安房上總の遠巒を望む。形物の壯大、類ふべきものなし。

殊に美はしきは、江の浦より清水に至るまでの田子の浦の景色なり。富士の裾野を縫へる小松原の濃き緑なるが、蒲原・興津わたり、淡き紫に薄れゆけるさまなど、心ゆくばかり嬉しく、天津少女の天降りけむ三保の松原の、春霞にかすめるが、この世ならず見ゆるもゆかし。仰げば高き富士が峯の千古の姿は言ふも愚かや。ああ誰が造りなしけむ自然の美しさよ。いかなれば人のみかくは穢れたる。

函嶺の一峯に雲起りぬ。はじめは膚寸の大いさなりしが、谷ひらけ、風加はりて漸く廣がり、はては八峯の全部を掩ひて、驀然として西の方に棚引きぬ。愛鷹の峯にかかる處、富士嵐に逆らひたるにや、雲行忽ち天に向ひて、劔拔萬丈、二山の間に白雲の壁を築けり。その頂山風に散じて、滿天を覆ひ、濛濛として咫尺を辨へず。我は衣襟をあはせて凝視すること多時。嘲風は杖を揮つて天を劃し、快哉を絶叫すること三たび。暫くにして空晴れて、函嶺の崔嵬、芙岳の清容もとの如し。滿天の雲霧、我、そのいづこに行きたるか。知らず。ああ天地風雲多し。人間何ぞ涕淚の繁きや。(高山樗牛)



後醍醐天皇。

一三 阿新殿の事上

さるほどに君の御謀叛を申し勧めけるは源中納言具行。右少辨俊基日野中納言資朝なり。各死罪に行はるべしと評定一途に定まりて、まづ去年より佐渡國へ流されておはする資朝卿を斬り奉るべしと、その國の守護本間山城入道に下知せらる。

山城國葛野郡花岡村。

この事京都に聞えければ、この資朝の子息國光の中納言、その頃は阿新殿とて、歳十三にておはしけるが、父の卿囚人になり給ひしより、仁和寺邊に隠れて居られけるが、父誅せられ給ふべきよしを聞きて、今は何事にか命を惜しむべき。父と共に斬られて冥途の旅の伴をもし、又最後の御有様を

も見奉るべし。とて、母に御暇をぞ乞はれける。

母御、頻に諫めて、佐渡とやらむは、人も通はぬ怖ろしき島。ところ聞ゆれ、日數を経る道なれば、如何にしてか下るべき。その上、汝にさへ離れては、一日片時も命存ふべしとも覺えず。と泣悲しみてとどめければ、よしや伴ひ行く人なくば、如何なる淵瀨にも身を投げて死なむ。と申しける間、母、いたく止めば又目の前に憂き別もありぬべし、と思ひわびて、力なく、今まで只一人附副ひたる中間を相副へて、遙遙と佐渡國へぞ下されける。路遠けれども乗るべき馬もなければ、はきも習はぬ草鞋に、菅の小笠を傾けて、露わくる越路の旅、思ひやるこそ哀なれ。



都を出でて十日あまりと申すに、越前の敦賀の津に著き  
にけり。これより商人船に乗りて、程なく佐渡國へぞ著きに  
ける。人してかうといふべき便りもなければ、自ら本間が館  
に至りて、中門の前にぞ立ちたりける。折節僧のありけるが  
立出でて、この内への御用にて御立ち候か。また如何なる用  
にて候ぞ」と問ひければ、阿新殿、これは日野中納言の一子に  
て候が、この頃斬られさせ給ふべしと承りて、その最後の様  
をも見候はむために、都より遙遙と尋ね下りて候」といひも  
あへず、涙をはらはらと流しければ、この僧心ありける人な  
りければ、急ぎこの由を本間に語るに、本間も岩木ならねば、  
さすが哀にや思ひけむ、聽てこの僧を以て持佛堂へ誘ひ入

れて、踏皮行纏解かせ、足洗ひて、疏かならぬ體にてぞ置きた  
りける。

阿新殿これをうれしと思ふにつけても、同じくは父の卿  
を疾く見奉らばや」といひけれども、今日・明日斬らるべき人  
にこれを見せては、中中よみ路の障りともなりぬべし、又關  
東の聞えも如何あらむずらむとて、父子の對面を許さず、四  
五町隔たりたる處に置きたれば、父の卿はこれを聞きて、行  
くすゑも知らぬ都に、如何あらむと思ひやるよりもなほ悲  
し。子はその方を見やりて、浪路遙かに隔たりし鄙の住居を  
思ひやりて、心苦しく思ひつる涙は更に數ならずと、袂の乾  
くひまもなし。これこそ中納言のおはします牢の中よとて



見やれば、竹の一村茂りたる處に堀掘り廻し、屏塗りて、行通ふ人も稀なり。なさけなの本間が心や。父は禁牢せられ、子は未だをさなした。たとひ一所に置きたりとして、何程の怖かあるべきに、對面をだに許さず、まだ同じ世の中ながら、生を隔てたる如くにて、なからむ後の苔の下、思ひ寢に見む夢ならでは、相見む事もありがたし。と、互に悲しむ恩愛の父子の道こそ哀なれ。

五月二十九日の暮程に、資朝卿を牢より出し奉りて、遙かに御湯も召され候はぬに、御行水候へ。と申せば、早斬らるべき時になりけりと思ひ給ひて、嗚呼、うたてしき事かな。我が最後の様を見むために遙遙と尋ね下りたる幼き者を、一目

も見ずして果てぬる事よ。とばかり宣ひて、その後は曾て諸事につきて言葉をも出し給はず。今朝までは氣色しをれて、常には涙を押拭ひたまひけるが、人間の事に於ては、頭燃を拂ふ如くになりぬと覺りて、只顯密の工夫の外は餘念ありとも見え給はず。夜に入れば、輿さし寄せて乗せ奉り、此處より十町ばかりある河原へ出し奉り、輿舁きすゑたれば、少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直りて、辭世の頌を書きたまふ。

五蘊假成<sub>ニ</sub>形<sub>ヲ</sub>

四大今歸<sub>ス</sub>空<sub>ニ</sub>

將<sub>テ</sub>首當<sub>ニ</sub>白刃<sub>ニ</sub>

截斷<sub>ス</sub>一陣風<sub>ノ</sub>

年號月日の下に名字を書きつけて、筆を擱き給へば、斬手



後へ廻るとぞ見えし、御首は敷皮の上に落ちて、體はなほ坐せるが如し。この程常に法談などし給ひける僧來て、葬禮式の如く取營み、空しき骨を拾ひて、阿新に奉りければ、阿新これを一目見て、取る手も撓く倒れ伏し、「今生の對面遂に協はずして、變れる白骨を見る事よ。」と泣悲しむも理なり。

一四 阿新殿の事下

阿新まだ幼穉なれども、けなげなる所存ありければ、父の遺骨をば只一人召使ひける中間に持たせて、まづ我よりさきに高野山に參りて、奥の院とかやに納めよ。」とて、都へ歸し登せ、我が身は勞る事ある由にて、なほ本閒が館にぞ留まり

ける。これ本閒が情なく、父を今生にて我に見せざりつる鬱憤を散ぜむと思ふ故なり。かくて四五日經ける程に、阿新晝は病の由にてひねもすに臥し、夜は忍びやかにぬけ出でて、本閒が寢處なんど細細に伺ひて、隙あらばかの入道父子が閒に一人さし殺して腹切らむずるものと思ひ定めてぞ狙ひける。

或夜雨風烈しく吹きて、宿直する郎等共も皆遠侍に臥したりければ、今こそ待つ處の幸よと思ひて、本閒が寢處の方を忍びて伺ふに、本閒が運や強かりけむ、今夜は常の寢處を替へて、いづくにありとも見えず。又二閒なる處に燈の影の見えけるを、これは若し本閒入道が子息にてやあらむ、それ



なりとも討ちて恨を散ぜむとぬけ入りてこれを見るに、それさへ爰にはなくして、中納言殿を斬り奉りし本間三郎といふ者ぞ只一人臥したりける。よしやこれも時にとりては親の敵なり、山城入道に劣るまじと思ひて、走りかからむとするに、我は元來太刀も刀も持たず、唯人の太刀を我が物と憑みたるに、燈殊に明かなれば、立寄らば廳で驚き合ふこともやあらむずらむと危みて、左右なく寄り得ず、如何せむと案じ煩ひて立ちたるに、折節夏なれば、燈の影を見て、蛾といふ蟲の數多明障子に取りつきたるを、すはや究竟の事こそあれと思ひて、障子を少し引きあげたれば、この蟲あまた内へ入りて、廳で燈を打消しぬ。今はかうと嬉しくて、本間三郎

が枕に立寄りて探るに、太刀も刀も枕にありて、主は甚く寐入りたり。まづ刀を取りて腰にさし、太刀を抜きて、胷元にさし當てて、寐たる者を殺すは死人を殺すに同じければ、驚かさむと思ひて、まづ足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴られて驚く所を、一の太刀に臍の上を疊までつと突通し、返す太刀に喉笛さし切りて、心閑かに後の竹原の中へぞ隠れける。本間三郎が一の太刀に胷を通されて、あつといふ聲に、番衆共も驚き騒ぎて、火をともしてこれを見るに、血のつきたる小さき足跡あり。さては阿新殿の仕業なり。堀の水深ければ、木戸より外へはよも出でじ、捜し出でて打殺せ。とて、手に手に松明をともし、木の下、草の蔭まで残る處なくぞ捜しける。



阿新は竹原の中に隠れながら、今はいづくへか遁るべき、  
人手に掛らむよりは自害をせばやと思はれけるが、憎しと  
思ふ親の敵をば討ちつ、今はいかにもして命を全うして、君  
の御用にもたち、父の素意をも達したらむこそ、忠臣・孝子の  
義にてもあらむずれ。もしやと、一まづ落ちて見ばやとおも  
ひ返して、堀を飛越えむとしけるが、口二丈深さ一丈に餘り  
たる堀なれば、越ゆべき様もなかりけり。さればこれを橋に  
して渡らむよと思ひて、堀の上に末靡きたる吳竹の梢へさ  
らさらと登りたれば、竹の末堀の向ふへ靡き伏して、やすや  
すと堀をば越えてけり。夜は未だ深し、湊の方へ行きて、船に  
乗りてこそ陸へは著かめと思ひて、たどるたどる浦の方へ

行く程に、夜もはや次第に明離れて、忍ぶべき道もなければ、  
身を隠さむとて日を暮し、麻や蓬のおひ茂りたる中に隠れ  
居たれば、追手共と思しき者ども百四五十騎馳散りて、もし  
十二三ばかりなる兒や通りつる。と、道に行合ふ人ごとに間  
言してぞ過ぎゆきける。

阿新その日は麻の中にて日を暮し、夜になれば湊へと志  
して、そことも知らず行く程に、孝行の志を感じて、佛神擁護  
の眸まなこをや廻らされけむ、年老いたる山伏一人行合ひたり。こ  
の兒の有様を見て痛ましくや思ひけむ、これはいづくより  
いづくをさして御渡り候ぞ。と問ひければ、阿新、事の様をあ  
りの儘にぞ語りける。山伏これを聞きて、我この人を助けず



ば、只今の程にかはゆき目を見るべしと思ひければ、御心安く思しめされ候へ。湊に商人船共多く候へば、乗せ奉りて、越後・越中の方まで送りつけ進らすべし。といひて、足たゆめばこの兒を肩に乗せ、背に負ひて、程なく湊にぞ著きける。夜明けて、便船やあると尋ねけるに、折節湊の内に船一艘もなかりけり。如何せむと求むる處に、遙かの澳に乗浮べたる大船、順風になりぬと悦びて、檣を立て、篷をまく。山伏手を上げて、「その船これへ寄せてたび給へ。便船申さむ」とよばはりけれども、曾て耳にも聞入れず。船人聲を帆に上げて、湊の外に漕出す。

山伏大きに腹を立て、柿の衣の露をむすびて肩にかけ、澳

行く船に立向ひて、いらたか數珠をさらさらとおし揉みて、「一持祕密咒、生生而加護、奉仕修行者、猶如薄伽梵」といへり。況や、多年の勤行に於てをや。明王の本誓あやまらずば、權現・金剛童子・天龍夜叉・八大龍王、その船此方へ漕返してたばせ給へ」と、跳り上り跳り上り、肝膽を碎きてぞ祈りける。行者の祈り神に通じて、明王擁護やしたまひけむ、澳の方より俄かに悪風吹來りて、この船忽に覆らむとしける間、船人どもあわてて、山伏の御房まづ我等を御助け候へ」と、手をあはせ膝を屈め、手に手に船を漕ぎもどす。汀近くなりければ、船頭船より飛下りて、兒を肩に乗せ、山伏の手を引き、屋形の内に入りたれば、風は又もとの如くに直りて、船は湊を出でにける。



その後、追手ども百四五十騎馳來り、遠淺に馬をひかへて、「あの船とまれ」と招けども、船人これを見ぬよしにて、順風に帆を揚げたれば、船はその日の暮程に、越後の府にぞ著きにける。阿新、山伏にたすけられて、鰐口の死を遁れしも、明王加護の御誓いちじるしかりけるしなり。(太平記)

### 一五 西郷隆盛に與ふ

山縣有朋、頓首再拜、謹んで書を西郷隆盛君の幕下に呈す。有朋、君と相識るここに年あり。君の心事を知るまた甚だ深し。曩に君の故山に歸養せしより、久しくその警咳に接することを得ざりしかど、舊雨の感豈に一日

明治六年鹿兒島に歸る。

も有朋の懷に往來せざらむや。料らざりき、一旦滄桑の變に遭ひて、ここに君と旗鼓の間に相見るに至らむとは。君が歸郷の後、世の鹿兒島縣士族の亡狀を議するもの皆曰く、「西郷實にその巨魁たり、謀主たり」と。然れども有朋は獨りこれを斥けて然らずとなせりき。しかるに今かくの如し。嗚呼、また何をかいほむ。

然れども密かに思ふに、事のここに至れるは、蓋し勢の止むを得ざるに出でしものにて、君の素志にてはあらざりしならむ。若し君にして初より眞に異圖を懷きしならば、何ぞかかる名なき軍を、かかる機を失へる時に起さむ。薩軍の今公布するところを見るに、罪を一二



明治七年佐賀の  
江藤新平叛す。  
明治九年熊本に  
敬神黨起り、次  
いで萩の前原一  
誠等叛す。

の官吏に問はむとするに過ぎず。これ果して舉兵の名を得たりといふべきか。佐賀の賊まづ誅せられ、熊本・山口の叛徒次いで敗れ、今や天下の士民、漸くその自省の志を立てむとす。しかして薩軍突如としてここに兵を舉ぐ。これ果して舉兵の機を得たりといふべきか。君の明識なる、豈にこれを知らざることあらむや。

説者また曰く、「天下不良の徒は、西郷の山林に韜晦したるを奇貨とし、これによりて功名を萬一に僥倖せむとするの念を懷き、その辭を巧にして、ひたすら朝廷の政務を讒誣し、西郷に説くに、「君出でずんば蒼生をいかにせむ、君にして義兵を舉げなば、天下靡然としてこれ

に向はむ」との旨を以てせしならむ。西郷の卓識なる、その讒誣たるを洞察するに難からざりしなるべしと雖

西郷隆盛の書翰  
西郷隆盛の書翰  
西郷隆盛の書翰

西郷隆盛筆蹟

も、その浸潤のいたす所、實に衆口金を爍かす勢ありて知らず識らず遂に事を舉ぐるに至りしならむ」と。聞く者これを然りとす。然れども有朋ひとり之を斥けて然らずとなす。何となれば若し君にして誠にその志ありしならば、單騎輦下に來りて、從容として利害のある所



を上言するに於て、妨もあらざるべければなり。

思ふに、君が多年育成せし壯士輩は、初より時勢の眞相をも知り、人倫の大道を履踐する才識をも備へたる者なるべけれど、かの不良の徒の教唆により、或はその一身の不遇によりて、その不平の念を高め、遂に一轉して悲憤の念を懷き、再轉して叛亂の心を生ずるに至りしならむ。しかしてその名を問へば、則ち曰く、西郷の爲にするなり」と。情勢既にここに至る。君が平生故舊に篤き情は、空しくこれを看過して、ひとり餘生を完うするに忍びざりしならむ。されば君の志は初より生命を以て壯士輩に與へむと期せしに外ならざりしならむ。君

が人生の毀譽を度外に置き、天下後世の議論を顧みざるもの故なきにあらず。嗚呼、君の心事まことに悲しからずや。有朋ことに君を知る深きが故に、君がために悲しむまた切なり。然れども事既にここに至る。これをいふとも何の益かあらむ。

顧みれば、交戦以來既に數月を過ぐ。兩軍の死傷日に幾百なるかを知らず。朋友相殺し、骨肉相食み、人情の忍ぶべからざるを忍びぬ。かかる戦の如きは、古來、例なきところなり。しかして戦士の心を問へば、ともに寸毫の恨あるにあらず。ただ王師はその職務のために、薩軍はその帥西郷のために戦ふといふに過ぎず。それ一國



の壯士を率ゐて、よく天下の大軍に抗し、劇戰數旬、百敗  
撓まざるもの、既に以て君が威名の實を天下に示すに  
足れり。しかして今や君の麾下の勇將、槩ね死傷し、その  
軍威、日に衰へむとす。薩軍の遂に志を成すこと、能は  
ざるは、既に明かなるにあらずや。君更に何の望むとこ  
ろありてか、徒に守戰を事とせむとする。若し人の「西郷  
は事の成らざるを知れど、暫くその餘生を永くせむが  
爲に、敢て千百の死傷を兩軍より出すを辭せざるなり」  
といふものあらば、有朋これに對ひて何とか答へむ。

願はくは君はやく自ら圖りて、一はこの舉の君が素  
志にあらざるを明かにし、一は兩軍の死傷を明日に救

ふ計をなせ。嗚呼、天下の君を議する實に極まれりとい  
ふべし。國憲の存するところおのづから然らざるを得  
ずといへども、思ふに君の心事を知る者、獨り有朋のみ  
にあらざらむ。しからば何ぞ公論の他年に定まるなき  
を憂へむ。故舊の情、有朋切にこれを君に冀望せざるを  
得ず。書に對して涕淚雨の如く、いはむと欲することを  
も悉す。あたはず。君すこしく有朋が情懷の苦を察せよ。  
頓首再拜。(山縣有朋)

### 一六 作文容易

文を作るは難きことなし。心そのままに文を連ぬれば、文は



自らにして成るものなればなり。想を述べ、事を敘するといふ二いろの外に、文といふものはなし。想を述ぶるの文は、吾が心に想だにあらば、それをその儘に書きつらねて、文そこに成るわけなり。想なくて想を述ぶる文を成さむとせむには、それは火の無きに煙をあげむとするが如くなれば、誠に難くもあるべし。想だにあらば、それを書現さむに難かるべきいはれなし。事を敘する文も亦然り。敘すべき事我が心の上に明かならむには、それをそのままに寫し出す時、文直にそこに成るべきなり。難かるべきいはれ更にあるべからず。若し敘すべき事なきに、事を敘する文を作らむとせば、それは空しき鍋より何物かを出して皿に盛らむとするが如くな

れば、實に難くもあるべし。敘すべき事だにあらば、それを書現さむに難かるべきいはれなからむ。述べむとする想、敘せむとする事あらば、唯心のままに書現すべし、文は自らにしてそこに成るべきなり。

述べむとする想、敘せむとする事は、千萬石の水ほどもあれど、筆の先には露ばかりも迸り出でず、誠に文は能くし難しといふ人あり。その人誠にしか思ひて、しかいふにもあらむ。されどそれは事實にはあらず。誠に千萬石の水あらば、それを湛へて迸り出でざらしめむことこそ難かるべけれ。蟻の穴より隄も破るる道理なれば、その水のいかで迸り出でざることあらむ。水にはあらで、未だ水とならざる雲の如きも



の、胷中に氤氳としてたなびけるなるべく、誠に千萬石の水の湛へられむには、迸り出でむこと疑あるべからず。

古より、文筆の人ならぬ人の文章の、神采奕奕、風趣津津、人をして或は襟を正し、或は涙を落し、或は奮ひ、或は悦び、或は深省を發し、或は手の舞ひ、足の蹈むを覺えざらしむるものあり。それ等こそ眞に胷中千萬石の水、自らにして筆端に迸り、楮表に溢れたるものとはいふべけれ。愛國の忠臣、思親の孝子、身を忘れて道の爲にせる哲人などの文章は、皆それなり。惻惻人を動かす文は、區區たる使字の巧、用語の麗なるより來らずと人の言ふも、この間の消息を語れるなり。法然親鸞の文、日蓮、向阿の文、又溯りて傳教、弘法の文、皆人を動かす

淨土宗開祖。(一)  
九三(一六七)  
眞宗開祖。(一)  
一九三(一)  
法華宗開祖。(一)  
八二(一四三)

淨土宗高僧。(一)  
一九六(五)  
最澄。(一四七)一四  
八二)  
空海。(一四三)一四  
九五)

ものあるは、文の成る前に既に文の在るありて、而して後に文自ら成ればなり。今の人動もすれば、吾が胷中に文ありて、しかも筆下に文なしといふは、誠に僭越に近し。文を成さむとする時、誠に文と成るべきものの心の中に乏しければこそ、文を作りわづらふなれ。若し述べむとする想、敘せむとする事のあるあらば、直にその儘に筆を走らせて、しかも文自ら宜しからむ。よくよく省みてあきらめ知るべし。

雲未だ凝らざる時、徒に空中に漂ふ。雨已に成りぬれば、などか地上に墜ちざらむ。多くの人の述べたき想も、敘したき事も無きにはあらねど、文の能くし難きを如何せむと言ふは當らず。その人の想といへるもの、未だ想といふ可からず、



その人の事といへるもの、未だ事といふに足らずして、想も事も總て朦朧曖昧にして、宛も雲の空中に漂へるが如し。唯その心の上にとりとめたる様もなく、明かなる色もなく、迷ひたなびけるに過ぎざるより、これに形を與へ、姿を賦して、文といふものとするに臨みては、如何にとも扱ひ難く、捌き難きわけなり。ここの光景を能く考へ省みて、我が文を作りかぬる所以の源を悟り得れば、やがて文といふものを成すべき道の坦坦として、砥の如く平かに、不思議も、手づまも、祕密もなきことを知るを得て、そこより一日一日に筆の力の自在は増すべし。(幸田露伴)

### 一七 讀書の選擇

\*Emerson.  
(1803—1832)  
者。米國の哲學

\*エマーソン曰く、「書を讀まば、最も適當なるもののみを讀むべし。さらぬ羣書の涉獵に、記憶力を徒費すること勿れ」と。かの新聞・雜誌と拙劣なる小説とのみを愛讀する者は、エマーソンの所謂劣等なる羣書に、記憶力を徒費する者なり。否、彼等にして、かかる劣等なる讀書の間に歲月を涉りて、毫も良好なる讀書に興味を見むることを勉めずんば、それは啻に時間と記憶力との徒費のみにあらず。かかる讀書は注意力を薄弱ならしめ、思想の清新を絶ち、氣象の煥發を妨げ、神餒を氣沮みて、人をして頹然として生氣なきに至らしむべし。これを覺醒せむとするには、いかにすべき。エマーソンま



た教へて曰く、讀書の最良法は、かの時間と紙とを以て製作したるものを描いて、直に天然を讀むにあり」と。然り、誠に汝の趣味の睡眠を自覺せば、暫くその新聞雜誌と小説とを棄てて、名山大川の間に、直に秀麗なる天然の文學に接せよ、親しく偉大なる審美の靈光に浴せよ。庶幾はくは汝が趣味を覺醒せしむることを得むか。

偉大なる文學は偉大なる天然に近し。天然の爲すところは天才の筆亦よくこれを爲すことを得べし。名篇大作に親炙するは恰も名山大川の間に逍遙するに似たり。されば善良なる讀書はよく眠れる趣味識を覺醒し、よくこれを啓發し、助成し、清新なる思想、斬新なる筆力を涵養するものなり

とせば、予は目下の讀書界を覺醒し、指導すべき唯一の急務は、これに讀書の選擇を教ふるにありと信ぜむとす。

苟も書を讀まむとせば、成るべく優等なるものを選ぶべきこと勿論なり。されども最も優等なる書即ち第一流の書は、天下そもそも幾何かある。今單に日本の文學書については、いはば萬葉の一部と源語と近松の作と、その他なほ強ひて二三を數ふるを得とも、一國の文學界の讀書をこの僅少なる書冊に限らむことは、殆どなし得べきにあらじ。否、かくの如きは、實に予等が褊狹・固陋として忌むところなり。

今この褊狹と固陋とを脱して、よく優等なる書に専なることを得むとせば、當にいかにかすべき。かのエマーソンは



實行し得べき方法なりと稱して、左の三則を示しぬ。

先づ曰く、「二年を経ざる著作は讀むことなかれ」と。蓋し一年を経てなほ社會に忘れざるものは、或は多少の趣味あるものならむ。一年をだに經ずして、反故として投棄せらるるものは、恐らくは一讀の價值なきものならむ。歲月の淘汰を待たずして、徒に争うて新版物を讀まむには、徒勞と時間とを賭して文學通の虛名を博し得むのみ。

又曰く、「有名ならぬものは讀むことなかれ」と。こは徒に所謂珍本に蟻集することなからむことを教ふるなり。そもそも名聲とは多數の識者の鑑賞の結果にあらずや。その多數の鑑賞に反して、ある機會のために纔かに散佚を免れし古

書を、殊更に熟讀せむは、殆どこれ癡に類せずや。さる疑はしき勞力を費さむよりは、まづ有名なるものを讀みつくせ。予等の眼前には、半生を讀書に費すとも、なほ熟讀・玩味する能はざるべき、許多の有名なる著作あるにあらずや。

又曰く、「嗜好に適せざるものは讀むことなかれ」と。極めて野卑なる嗜好の人を誤ることは、いづれの方面においてもわれらの知るところなれども、前述の二條件に適合したる範圍において、その嗜好するところを求めば、蓋し大過なきを得むか。ヒルは更にこの條件を敷衍してはく、「再度以上讀破することを欲せざる書は讀むことなかれ」と。試に思へ、現時の讀書界がよく再讀・玩味したる新版物、そもいくばく

\* A. S. Hill.  
米國ハーバ  
ー  
ト大學教授。



かある。讀者は選擇を忘れ、作者は推敲を忘れ、相率ゐて没趣味の中に投ぜむとす、歎ぜざるべけむや。  
故におもへらく、以上の三則は、讀書界の時弊を救ふべき  
最好手段なりと。

### 一八 馬琴日記鈔

一、この節大暑凌ぎかね、著述暫く休暇。讀書消日す。(文政九年六月十八日)  
勝美曰く、翁が讀書癖の尋常ならぬ事、この條以下の記事これを證す。古人が「我愛夏日長」といひけむことも思ひ出されて、ゆかしき極みなり。  
一、今日大暑に付き休業。終日讀書消日。今夕五時就寢。(天保二年六月二十日)

(一) 瀧澤解、曲亭馬琴と號す。(二四七—二五〇)

(三) 黑板文學博士。

(四) 人皆苦炎熱、我愛夏日長。(唐太宗)

一、八犬傳九輯三十五の分百六十一回の内、一丁半稿之。大暑に堪へず、晝後より休筆。(同十年六月三日)



瀧澤馬琴

勝美曰く、老齡衰眼を以て暑中なほ筆を休めず、しかも慘澹たる經營の間に筆を行る、一丁又一丁、遂によく浩瀚なる八犬傳を卒ふ。翁にあらずんば、誰かかの長篇大作を成す事を得む。

一、八犬傳九輯三十五の口、版下寫本、誤寫六七箇處、予書きなほし、お路に張入れさせ拵へおく。晝飯後より避暑午睡一時半ばかりなり。これによりて八犬傳九輯三十三の附言初丁

(四) 馬琴の子宗伯の妻。



(一) 天保四年右眼失明、同九年春より左眼亦漸く見えず。

(二) 芳賀文學博士。

(三) 天保十年(四九七)七十三歳、没年より九年以前。

(四) 饗庭氏。

(五) 文政七年神田同朋町なる宗伯の家に移る。

より僅かに一丁稿之。とかく見えかね、細字尤も不便なり。夕方浴し、今夕五時半より就枕。(同十七日)  
矢一日く、讀書と半日の休筆と一時半の午睡とは、實に翁の避暑法なり。老年なほ斯くの如し、その勤勉驚くべからずや。今の青年子女少しく之に鑑みて可なり。

篁村曰く、翁が住居飯田町中阪も、神田同朋町も、ともに矮屋陋居といふにはあらねど、決して廣廣したる處にあらず。そこにありて、一日机邊を離れず、大暑の砌はいかに暑熱の厭はしかりけむ。僅かに半日の休筆と一時の午睡之を以て避暑とせらる。今の弱蟲どもは愧ぢて死すべきなり。翁は早起早寢にて、朝は六つ時、夜は五つ時、又は四つ

時、これが定規にてありしとぞ。

(六) 馬琴の舞、飯田町住。

(七) 人情本作者。(三編 兎一三〇三)

一、山本宗洪殿過日攜へ來て見せられ候五經昔物語五卷全一冊、一向の俗書見るに足らず候間、今日清右衛門歸路、山本殿へ差出し、請取書とり候義申付け、あて板入れ、袱紗に包み、手簡相添へ、清右衛門に渡し畢んぬ。(同五年六月四日)  
一、爲永春水作、大學笑句といふものをお路に讀ませ聽き候處、經書を遊び、聞くに堪へざるものなれば捨去る。(同十五年五月六日)  
矢一日く、馬琴が當時の戲作者等と伍せず、獨り自ら高うせし見識を見るべし。  
篁村曰く、一室に閉居して世俗と絶ち、先賢古哲を友として、翁が讀書三昧に入られしはいふ迄もなし。儉約して



唐の、大和の珍書を購ひ、得難きものは友人に借りて、殆ど  
あらゆる限の書を見盡さむと心掛けられたるなり。山陽の  
日本外史未だ版にならざりし時、一本を寫し得て、その勤  
王論我が意に愜へりと悦ばれたるにても、その一端を知  
るべし。

春水の作を讀ませて聽き、聞くに堪へずとせられしは、  
春水を憎まれし事強き上、春水また翁の作を自儘に再版  
したる等の無禮あれば、一しほなりしなるべし。しかも卑  
人の俗書をもなほ讀ませて聽かれしにて、翁の讀書癖の  
いかばかりなりしかを察すべし。翁當時の戲作者と伍を  
なすを厭はれしは勿論にて、中に幾分敬愛の念ありしは

合巻作者 (三四三)

一五〇(一)

滑稽本作者 (三四)

一五一(四八)

滑稽本作者 (三四)

二五一(四九)

(四) 丹後國與謝郡、  
(五) 同國加佐郡。

(六) 丹後國與謝郡吉  
津村の智恵寺を  
切戸の文殊とい  
ふ。

柳亭種彦のみ、三馬は敗家の賊となし、一九は論ずるに足  
らずとせられたり。(馬琴日記鈔)

### 一九 思ひ出

春の夜は靜かに更けぬ。はゆま路の竝木のけぶり。  
箱馬車は轍をどりて 宮津より由良へ急ぎぬ。

朧夜の窗のあかりに、 京むすめ、難波あきうど、  
朽尼や切戸まうでや、 人の世の旅の道づれ。

物語、欠伸まじりに、 眠り目のとろむとすれば、



誰が子にか、後への方に、をりからの追分ぶしや。

清らなる聲ひとしきり、谿あひの水のせぜらぎ  
咽び音に響きわたれば、乗合はなみだこぼれぬ。

月落ちて闇の夜ぶかに、箱馬車は由良に來つきぬ。  
まらうどは車をおりて、西東みちに別れぬ。

その後や幾春經けむ、おほ方は夢に現に  
忍びてはえこそ忘れね、由良の夜の追分上手。

その子今何處にあらむ、思ひ出の清きかたみや  
人人のところに生きて、とことにはに姿ぞわかき。

(薄田泣菫二十五絃)

## 二〇 世界の歌枕 上

大西洋の浪は、太平洋のとは幾分違つてゐる。太平洋の浪は大きく緩く打つが、大西洋のは、多く天氣が悪い爲か、とにかく稍小さく鋭く感じた。空の色の關係もあらう。大西洋の空は澄んだ藍ではなくて、稍黒ずんだ、時としては鉛のやうな色に見える。だが緯度が次第に高くなるにつれて、浪の色は淡く、入日の華やかさは違はないが、夕雲の色彩も漸くあ



つさりとして、南海の絢爛な色よりも卻て美しい。

太平洋で私の遇つた大浪は、桑港に著く三日ばかり前の一日であつた。小山の如き浪が寄せかへるので、さしもの大船も木の葉の様に動搖したが、幸にも、此の日は頗る上天氣で、風もなかつた故、甲板の上でその壯觀を味ふ事が出来た。大西洋の方は、一體に山をす巨浪は少ないが、米國を去つて五日ばかりの一日、暴風雨に類した天氣に出遇つた。要するに、海の景色は取出でて人に語る事は難いが、經驗のある者が後日追想すると、單調な様で、實は千變萬化する美觀を憶ひ起す。これ實に究竟の歌枕。又桑港の港近くなつた海の上、數百羽の鷗が船に沿うて舞つてゐる所から遙かに眺むれ

ば、金門灣頭の大浪が港口に押寄せ有様水の屏風を立て廻した如く、海の上にも瀧があるかとも疑はれた。これはた歌枕に逸すべからざるものと思ふ。

陸上の景色は、土地によつて著しい相違がある。布哇の如き、四時氣候を同じうして、太平洋の樂園と稱せられる地に行くと、満目の風光一變して、はじめての人には非常に面白い。遠淺の海が極めて澄んだ萌黄の色に見えて、それに椰子の林をあしらつた風情は、繪畫で見るよりも、實際の方が不思議なくらい美しい。これからの人が歌枕の一つとすべき處だと思ふ。その地の公園に遊んだ時、蔚然たる榕樹の下枝に放し飼の孔雀がとまつてゐて、そのあてやかな羽毛が花



のやうであつたのを記憶する。

熱帯地方はいふ迄もないが、歐米の風光は日本に比して  
いたく趣を異にしてゐる。かの國には、わが國よりも草木が  
尠ない。見る山も見る山も、日本の様に松杉が山全體を蔽う  
ては居ない。あるは芝山の如く、あるは只岩石のみのやうな  
山の處處に、偶、青青した樹木が十數本繁つて居るといふ風  
の景色が多い。それで日本人は動もすれば、わが國の景に草  
木の多いのを誇稱するが、それは稍偏した見地であつて、兩  
方ともにそれぞれの美しさがあるのは無論である。併しな  
がら極めて土地の礪確なのは、勿論景色が好いとはいはれ  
ない。私が米國を通過した頃は、殊に冬枯の候であつたから、

人氣ないもの寂しい廣漠の野を行く心地がした。

槩してあちらの木はひねくれてゐない。皆すうつと直立  
して、地面を離るる數尺の處から、四方に向つて枝が規則正  
しく手を擴げてゐる。かう規則正しくなつてゐる枝振は、い  
かにも風趣が乏しい様ではあるが、實際はさうでない。

(一) Wyoming.  
北米合衆國西  
部の州名。

更に亞米利加の歌枕一二を擧げると、先づワイオミング  
の平原であらう。眼の届くかぎり一物もなく、雪がちらちら  
降つてゐる中を、たまに羊の羣が鐵道線路のあたりをさま  
よふなどは、優美な姿には缺けてゐるが、一種壯大な趣があ  
る。名にし負ふサルトレークの鹽の湖を中斷する長路を通  
ると、平原の間に丘陵の起伏して、雪斑らの岩角に朝日の反

(二) Salt lake.



(一) Colorado.  
(二) Cañon.

名高き峡谷。

射する景色、これ亦歌枕の價值あるものといはねばならぬ。又コロラド州の北所謂キャニオンの一部は、奇石・怪岩が路傍に磊磊として、さながら鬼工と思はれる。この景も歌枕に逸すべからざるところである。

二一 世界の歌枕 下

扱、この歌枕といふ詞は、も少し意味を廣くして見たいと思ふ。即ち山水の風景ばかりに止めず、進んで紅塵萬丈の市街、煤烟の立昇る工場の光景なども、詩歌に寫し出して面白からう。例へば紐育の摩天閣(ヒトスカイスクレパー)の如きも、その或物は建築美を持つてないが、中には一種の新しい趣味の徹底して居るも

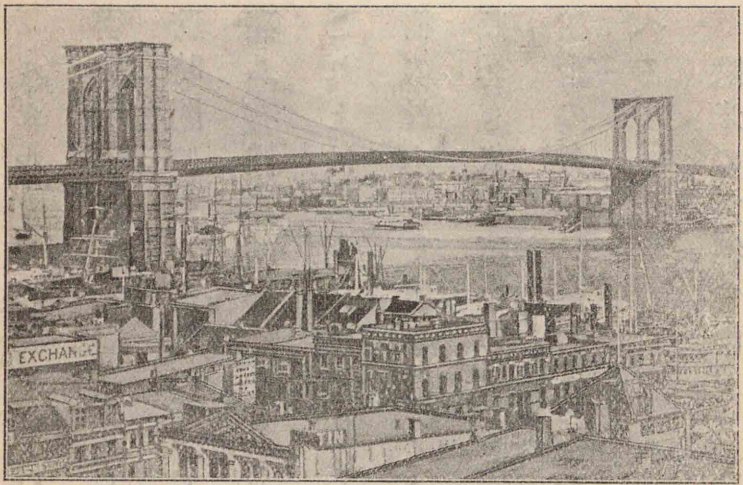
(三) Sky-scaper.

(四) Brooklyn.

(五) Hoboken.

(六) Madison.

(七) Barrel-organ.



のがある。ブルークリンの釣橋の上から紐育を望むと、建列

ねた大廈高樓が雲に聳えて、殊に薄暮は、二十階・三十階の窓の灯が空の星かと閃いてゐる。或はホボークンの港口、朝霞の景色、夕暮の色、他國に無い趣致がある。更に人情・風俗を加へて景色を見ると、愈、好箇の歌枕がある。紐育マヂソンの大辻、世界の富を集めた繁華な場所に立つて、伊太利の移民が弾く哀なバ



(一) Wall-street.

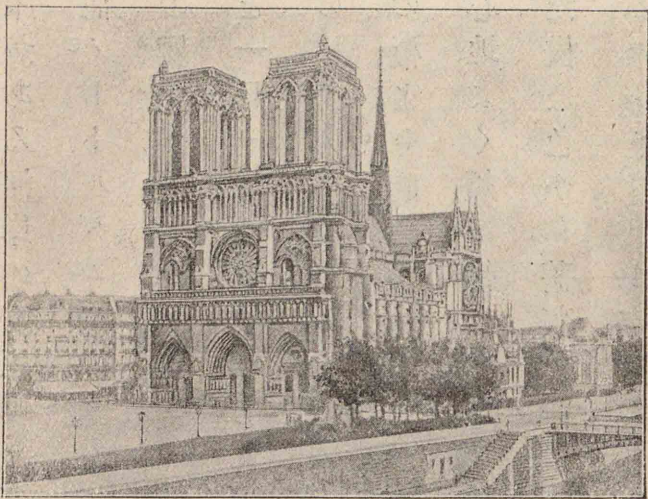
(二) New England.

レル・オルガンの聲を聞けば、聲こそは細けれ、近代文明の弊害を呪ふ切實な音楽かとも聞える。ウォルストリートの執務時間に、その邊を通ると、黄金の爲に萬人の血眼になつて狂ふ有様に、賭博場を見るよりも猶慘澹たる感を催す。またこれとは反對に、冬の田舎に入つて見るに、葉の落盡した楓樹の竝木路を、雪を蹴つて小學校生徒の走つてゆく所などは、若き米國萬歳の聲を發したい位。ニューヨークランドの田舎の景色は、落著いて若若しい、如何にも懐かしい感を與へる。

歐米の大都會中、どこが好いといはれたなら、誰も誰も賞めるのは、パリであらう。市街の美觀、道路の整頓はいふに及

(三) Champs Elysees.

(四) Seines.



院 寺 ム ダ ル ト ー ノ

ばず、氣候の溫和、風光の美、風俗の雅致ある、かういふ處に住んで詩でも詠んでゐたいとは、誰しも望む所かと思ふ。アンゼリゼエの大通は、長安の盛時ものか、は、端麗・高雅、實に世界第一である。歌枕はどこにもごろごろしてゐる。文明の最高に位するは佛蘭西である、而してパリである。それで又極めて華美な中に、も、何となく仙人めいた趣もある。車馬絡繹たるセエヌ河の



(一) Notre Dame,  
(二) Gothic-style.

(三) St. Michael.

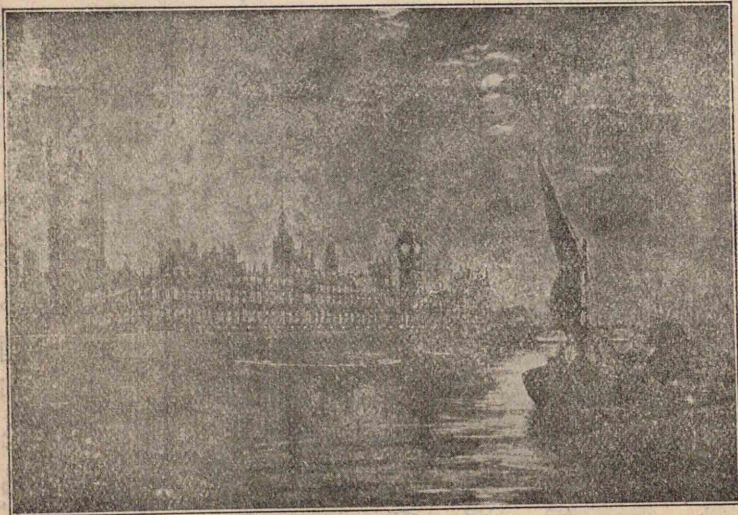
(四) Charlotte.

邊りに、悠然綸を垂れる隠君子もある。橋の下には、犬の理髮床がある。河岸の石垣の上には、お馴染の古本屋がある。その他、ノートルダム寺の建築は、ゴシック式の標本で、朝夕の色の變化が著しい。嘗てノートルダムの總ての變化を味はうと、一日一晩の閒眺望した事もあつたが、最も美觀を極めたのは夕方で、黄金の光の波を浴びた景色を、サンミシエールの橋より眺めた時であつた。又、夜のしらじらあけに、朝風の心地よく頬を拂ふ時、之を望むのも好い。眞珠の色を曇らせ、た様な色から、薔薇色のはてやかなのに至る迄の色合の微かな影を味ふ事が出来る。その外、花を賣る老媪の風、ジャレットの帽子を被つてボールの箱を抱へた店通ひの賣子

(五) Percheron.

(六) Turner.  
(1775-1851)

の姿、ペルシロンといふ、牛よりも大きい馬を曳く馬丁の振、夜半近く芝居のはてに雨が降つて、幾千の街燈の光が敷石に映る處、自働車は唸り、馬車は軋る不夜城の壯觀、満目の時勢粧、皆歌枕ならぬはなしといふ趣がある。  
倫敦は、景色の地として、さほどに人は賞めないが、色彩の變化、その色合の豊富な點は、ターナーの繪にある通り



倫敦ターナーの河畔の夜景



(一) Thames.  
(二) Richmond.

で、風俗美は尠ないが、光線の變化ばかりは味ふ値がある。しかし同じく風光を味ふにしても、住心地よい巴里の方が、あらゆる旅客の賞揚する所だと思ふ。ただ倫敦にも、テムス上流リッチモンド近傍の兩岸の風景などには英國特有の美觀がある。

(四) Salzburg. (三) Napoli.

この他、風車、朱い屋根、清き淀に名ある和蘭もよく、伊太利ではナポリあたりの夢の様な景色も好い。瑞西は風光明媚と稱せられる國で、誰も皆賞揚するが、私は寧ろ南獨逸を採る。南獨逸ザルツブルヒの景は日本に酷似してゐる。

要するに、何處が一番風光は絶佳であるかといふ問題は、一槩にはきめ難い。見る人の心心によつて、天下到る處、如何

(五) Red Sea.

なる地、如何なる處と雖も、皆相當の美を味ひ得るものである。浪の激しい英海峽の船の上でも、暑さ堪へ難い紅海(五)の甲板でも、それぞれの美しさが感ぜられよう。元來歌枕などと取出でてきめるのは、或は間違つてゐはしまいか。天下皆歌枕ではあるまいか。

私の旅行は、學術研究の爲でもなく、また特別な使命を帯びたのでもない。只漫然と飄遊したので、感覺を通して、かかる印象を捉へただけであつた。(上田敏)

## 二二二 揚子江湖航

予は今朝長沙を去りて、漢口に歸航する湖南汽船會



社所有船湘江丸の客船中にあり。船は既に湘江を出て洞庭湖に入れり。風あり、波あり、時に雨あり、冷氣秋の如し。乃ち小閑を得て長江溯航を略報致すべく候。

七月九日夜九時、上海に於て、大阪商船の大吉丸に乗込み候。九日の夜といはむか、十日の曉といはむか、我が大吉丸は既に長江の本流に入れり。江といはむか、海といはむか、極目際なし、唯茫茫として月影の江心に涌くあるのみ。快眠一霎後、甲板に出づれば、兩岸の風色、我が精銳なる雙眼鏡の力を假りて、始めて仔細を辨ず可し。叢生したる蘆葦は定めて北清の高梁とその長を競ふ可く、柳蔭の民舎は槩ね蘆葦を以て葺けるが如し。水邊

\*一清里は我が五町六間に當る。

に眠る水牛、水草の裏に魚を撈る漁夫、河童の如く隄外の小流に出没する兒童、而して往來織るが如き小帆、大帆、悉く指顧の間に在り。然も長江の大には何といふとも平身低頭せざるを得ず候。この邊は四十清<sup>\*</sup>里の河幅に候由、その大きさを加減御察しこれあるべく候。即今揚子江は増水すること四十尺以上と聞及び候。正にこれ長江最大膨脹の季節に候。

船中無事。唯、長江圖説によりてその地理を察し、その雄偉壯大なる光景に應接すると、然らざれば籐椅子によりて江上の涼風を滿面に受けつつ、晝寢を貪るあるのみに候。



(一) 露おかぬ方もありけり、夕立の空より廣き武藏野の原。

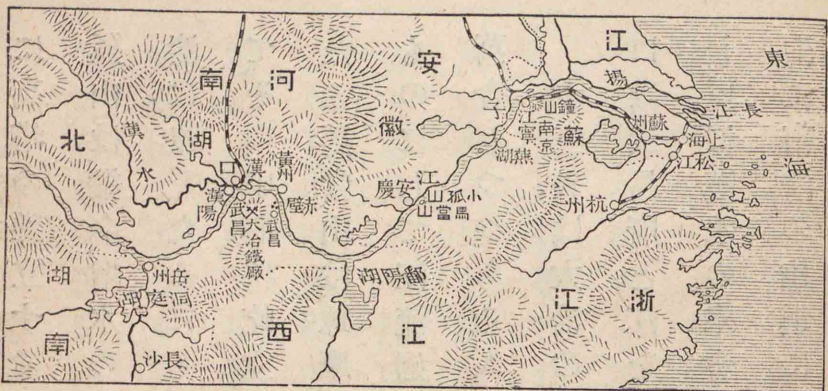
(二) 王安石、宋の政事家、文學者。(六一七四)  
(三) 濟國安徽省、上海を去る三四〇哩。

渺渺奔波與岸平。半江雷雨半江晴。  
布帆多在柳梢上。掠水沙禽不識名。

これは全くの實景に候、一字の虚構なし。夕立の空より廣き武藏野の原と太田道灌が詠じたる句も今更思ひ出され申候。ただ「與岸平」と申せども、時としては岸上に溢れ申候。漢口平水五十尺と申せば、今日にては九十尺なり。一萬五千噸の戦鬪艦の六百哩の上に溯るも、決して不思議に無之候。

十一日は長江の雨景を眺め候。南京即ち金陵に著したる頃は江雨霏霏たり。王荆公の夢寐忘るる能はざりし鐘山も、江雲模糊の裏に半ば封ぜられ候。蕪湖に至れば

(四) 元の施耐庵の作りし小説。



ば大雨盆を傾くるが如し。別に致し方もなければ、船中備付の水滸傳を讀みて閑を消し候。而して予は今更の如く、水滸傳が支那人の思想及び生活を敘するに於て要領を得、肯綮に中りたるを感歎致候。乃ち風景を記するに於ても、實際に近しといはむよりも、實際その儘と存候。

十二日は長江航行中最も獲物多き日に候。安慶府に抵れば、江畔



唐の文人。

肥後の巨川、日本三急流の一。

に高塔の聳立するあり。唐宋詩人の好題の一たりし小孤山は、縦令、増水の爲に平生よりも深くその腰骨を洪濤に没したるにもせよ、なほ滾滾たる長江の砥柱として、その中心に屹立するあり。陸龜蒙が天下の險と稱したる馬當山は、球摩川の所謂槍流しを大仕掛にしたるものにして、江流廻環、小渦・大渦・大大渦のその下に千轉萬合しつつある、人をして爲に毛髮を豎てしめ候。

十三日は大冶の鐵山を遙見し、薄暮漢口に著し候。漢口は武昌府と江を隔てて相對し、恰も馬關と門司の如し。更に漢水の來會する頭に漢陽あり、鼎立の姿をなし、洵に南清の雄鎮に候。著船と同時に湖南汽船會社の木

幡氏來船し、同夜直に同社の湘南丸が長沙に向けて發航するにつき、同行すべきやとの誘引有之一議に及ばず、渡りに船の心地にて直に乘移り申候。

十四日、目覺むれば身は湘南丸の上において、漢口上流の揚子江を溯りつつあり。この邊、江口より六百餘哩の上なれども、江の幅はなほ一哩以上或は二哩にも及ぶ可し。否、江水の汜濫横流に至りては依然森茫たり。江岸には隨處水牛羣をなし、兒童の水牛を驅使するや、狗兒を扱ふよりも容易なるが如し。耕作には固よりこれを使用致居候。その江畔の柳蔭に、兒童が牛背に腰を掛けて悠然たる様は宛然一幅の畫に候。而して増水の痕



跡は隨處にあり。根拔きの柳樹抔到る處に倒れ居候。

十五日、起ちて江水を見れば既に碧なり。乃ち船の洞庭湖に入りたるを知る。九日以來、赤味噌汁の如き江水の中に生活したるこの身に取りては、如何にあり難かりしよ。直に洞庭湖水の水風呂に浴し、心身爽快に相成り申候。

湘江に入れば碧愈、碧江流も漸く縮まりて、始めて河らしく感じ候。

申す迄もなく、洞庭湖の見物は、大筏に候。一箇の筏の上には十數軒の家あり。豚も飼へば、雞も養ふ。時としては野菜畑さへ有之。遠く望めば一村落の如し。然り、一村

落が筏となりて洞庭を過ぎ、漢口を経て蕪湖に達し、此處にて豚雞等悉皆賣捌く由に候。

(徳富蘇峯「七十八日遊記」に據る)

### 二二三 繪畫の感化

下總國の古河驛に、その氏は忘れしが、茂足といふ歌人ありき。その人、二十年ばかりの昔、陸奥に來りて物語せし事ありしを、今おもひ出でたれば、書綴りて人人に見せまゐらせむ。

茂足少き時、東海道より京に上るに、近江の石部と水口との間に、萬里小路中納言藤房卿の古跡と彫りし碑あるを見



たりしかば、その跡のゆかしさに尋ね入りて見るに、観音寺といふ寺ありてそこに卿の念じ給へりといふ観音を安置せり。

その御佛の御前に、われよりさきに旅商人と覺しき五十餘歳の男入來りて、何事を歎くにか、さめざめと泣きみたり。うちつけにその故を問ふべくもあらねば、立去りて本の驛路に出でぬ。頃しもきさらぎの初なりければ、日影あたたかなるところ見出でて憩ひ居たるに、かの男も出て來ぬ。茂足は、日影も暖かなり、ちと休み給はずや」といふに、かの男會釋して、同じ所に腰うちかけたり。暫し四方山の物語して、さて後に「さきには観音寺にて見かけまゐらせしが、かの卿には

深き御由縁などおはしますにや」と問ふに、恥ぢらひたる氣色にて「さては世に似ぬ歎せしをや見給ひけむ。賤しき身のいかでやむごとなき御方に由縁などいふことの候べき。但し今日しも不圖思ひ出でし事ありて涙せきあへざりけるを、恥かしくも怪しまれ候ひけむ。懺悔には罪も滅ぶと承れば、若き時の罪ほろぼしに、道すがら語り聞えむ」とて、諸共に立出でぬ。

この男は津の國大阪の人にて、稚なかりし時に、父母を喪ひ、高麗橋あたりの商人の家に奉公してありけるが、その家の子は遊蕩に耽りて、家繼がすべくもあらぬ様なりしかば、父は怒りて勘當しけれども、母刀自は一人の男子ゆゑさす



がにいとほしがりき。上總の東金とうごんに出店あれば、竊かにそこ  
守る人に頼みてむとは思ひよりしかど、遙遙の旅路を獨り  
遣らむも心もとなくて、この男召出でて、おことは御兩親共  
に世にまさねば、何處に住むとも心安からむ。後には必ず家  
分けて得さすべし、暫時が程、わが子に具して上總の方に行  
きてよ。とて、金二十兩預けられたり。さてその子と共に大阪  
を出でたれども、若き人の習にて、勘當受けし身のなほ過を  
悔いもせず、夜毎に酒色を廢めざれば、中山道の蕨あし驛やきに來り  
し頃は、その金も殘少なになりたり。

\*武藏國北足立郡。

明日江戸より船出せば、東金に渡らむ事も難からじなど  
聞くにつけて、行末の事を思ひ續くるに、かかるたのもしげ

なき人に具して、出店に行きたらむには、假令母刀自の書あ  
りとして、同じむれのえせ者とや思はれむ。よしさは思はれず  
とも、この人の心をほらぬほどは大阪にもえ歸るまじ。とに  
もかくにも、よしなき人に伴ひて遙かにも來りけりと、悔し  
さ限なかりしが、また思ふ様、身を立て、よすが求めむには、江  
戸にまさる所やはある。ここまで來しこそ幸なれ、今宵の中  
にこの人を棄てて奔らばやと思ひよりしかど、暫時の程も  
貯なくてはいかかはせむ。かくと知りなば、預りし金あるう  
ちに、とにもかくにもすべかりしを、後れにけりと、又更に悔  
しがりけるが、この人の脇差は、その父の物好より、百兩餘の  
つひえもて造りたるものなることを思ひ出でて、よしよし



こを盗みて賣代となさむには、十日二十日の日を送るに難  
き事はよもあらじと、心一つに謀りすまして、さらぬさまに  
もてなしつつ、今宵かぎりの旅寝なればなどいひ拵へて、酒  
勸めて寐させつ。

夜ふけて後にそと起出で、枕邊に忍びよりて窺へば、建て  
まはしたる屏風の内に、鼾の聲のみ聞えたり。時こそよけれ  
と、徐に屏風に手を懸けて引きあくるに、内より行燈の火影  
のさとさし出でて、後の襖障子に映りたるを、人や來ると驚  
きて顧みれば、今までは見も入れざりしその襖に、藤房卿の  
笠置より後醍醐天皇の御供して、大和の方に落ち給ふとき、  
松蔭に袖しきて、その上に帝を寐させ奉りし形をなむ畫き

たりける。この男これを見て、あなあさまし、やむごとなき御  
方だに、君の御爲には、かかる習はぬ憂きめをも見給ふもの  
を、いかなれば、われは主の物盜まむとまで思ひなりにけむ  
と、悔しくも口惜しく覺えて、寐ねたる人の枕邊に額づき、繰  
返し繰返し、その過をうちわびたりき。

かくて東金に到りて後も、憂き事あればこの夜の事を思  
ひ出でて、六年七年過ぎたりしに、その人も心改まり、家に歸  
りて父の跡を繼ぎしかば、われも約束の如く家分けて與へ  
られたり。それより次第に仕合せ好くて、今は家業も子に任  
せて、あかぬ事なき身にはなりにたれど、さてのみ居らむも  
うしろめたさに、折折はこころあたりまで物あきなひにま



あるなり。さればいつとてもこの御寺には詣でぬれど、今日しも不圖思ひ出づれば、若しその折しもこの卿の御姿を見まゐらせずば、いかでかく事なくて世にはあり經べきと、かたじけなさに涙はふり落ちて、君にも怪しまれ候ひぬ。われは賤しき生れながら、若き時より軍物語の書讀むことを好みければ、その時しもこの卿の事を思ひ出でて、まさなき心を改めぬ。よりて子供等にも、物讀むことは常に厳しく掟て侍り」と語りぬとぞ。茂足はその頃四十歳ばかりの人なりき。

(那珂通高—洋洋社談)

山城國相樂郡。

二四 笠置山

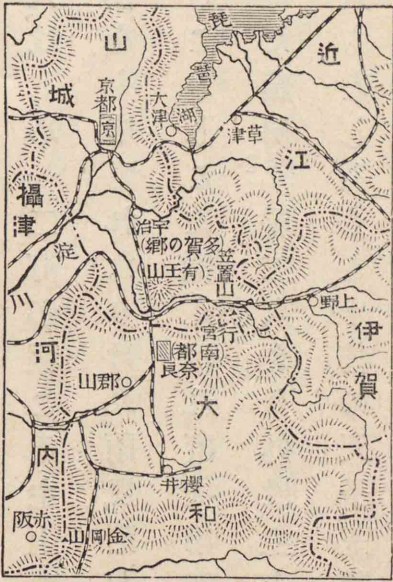
さるほどに、類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかかりければ、主上を始めまゐらせて、宮宮卿相・雲客、皆歩跳なる體にて、いづくをさすともなく足にまかせて落行き給ふ。この人、はじめ一二町が程こそ、主上を扶けまゐらせて、前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈しく、道闇くして、敵の鬨の聲ここかしこに聞えければ、次第に別れ別れになりて、後にはただ藤房<sup>(三)</sup>・季房<sup>(三)</sup>二人より外は、主上の御手を援きまゐらす人もなし。忝くも十善<sup>(四)</sup>の天子、玉體を田夫・野人の形に變へさせ給ひて、そのことも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有様こそあさましけれ。いかにもして夜の内に赤阪<sup>(五)</sup>の城へと、御心ばかりを盡されけれども、假にもいまだ習はせ給はぬ御歩

(三) 藤原宣房の子。  
(一) 藤原の弟。  
(二) 不殺生、不偷盜、  
(三) 不邪淫、不妄語、  
(四) 不惡口、不兩舌、  
(五) 不綺語、不慳食、  
不瞋恚、不邪見。  
河内國南河内郡。



行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二足には立止まり、晝は道の傍なる青塚の蔭に御身を隠させ給ひて、寒草の疏なるを御座の茵とし、夜は人も通はぬ野原の露わ

け迷はせ給ひて、羅穀の御袖をほしあへず。とかうして、夜晝三日に、山城の多賀の郷なる有王山の麓まで落ちさせたまひけり。



\*山城國殺喜郡

藤房季房も三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ、身疲れて、今はいかなる目に逢ふとも逃げぬべき心地せざりければ、せむ方なくて、幽谷の巖を枕にて、君臣兄弟諸共に向

つつの夢に臥し給ふ。梢を拂ふ松の風を、雨の降るかと聞し召して、樹蔭に立寄せ給ひければ、下露のはらはらと御袖にかかりけるを、主上御覽ぜられて、

さしてゆく笠置の山を出でしより、

あめが下にはかくれがもなし。

藤房卿涙をおさへて、

いかにせむ、憑む蔭とて立寄れば、

なほ袖ぬらす松のしたつゆ。

山城の國の住人深須入道・松井藏人二人はこの邊の案内者なりければ、山山峯峯、殘る所なく搜しける間、皇居隱なく、尋ね出されさせ給ふ。主上誠に怖ろしげなる御氣色にて、汝



等心ある者ならば、天恩を戴きて私の榮華を期せよ。」と仰せられければ、さしもの深須入道俄かに心變りして、あはれ、この君を隠し奉りて、義兵を挙げばや。」と思ひけれども、後に續ける松井が所存知り難かりける間、事の漏れ易くして、道の成りがたからむことを憚りて、もだしけるこそうたてけれ。俄かの事にて、網代の輿だになかりければ、張輿の怪しげなるに扶け乘



後醍醐天皇

(二) 山邊郡朝和村、  
(三) 殷の湯王、  
(四) 勾踐。

(四) 曾我十郎祐成の幼名。  
(五) 曾我五郎時致の幼名。  
(六) 名は滿江、祐泰の死後、曾我祐信に再嫁す。

せまゐらせて、まづ南都の内山に入れ奉る。その體、ただ殷湯夏臺にとらはれ、越王會稽に降ぜし昔の夢に異ならず。これを聞き、これを見る人ごとに袖を沾さずといふことなし。

(太平記)

### 二二五 一萬と箱王

新玉の年立ちかへり、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。ある夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、「いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。その佛は何國にましますぞや。往きてをがみ奉らばや。母御前いざさせ給へ。」といひければ、遙かに忘れたるこし方も今更思ひいだされて、消入る



曾我太郎祐信。

工藤祐經。

源賴朝。

相模國足柄下郡  
曾我中村。

ばかりに思はれて、母泣く泣くのたまひけるは、「あの曾我殿こそおのれ等が父にてあれ」と、心強く語らひけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、「父御前は、誠やらむ」狩場より歸り給ふ道にて、工藤一臈とやらむに射られ、死に給ひぬ」と、兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきり者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さむとや思ふらむ。我等この里に在りと知らずや過ぐらむなど、おとなしく語りければ、母よりはじめて女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びゐたるに、五つ連れたる雁が

河津祐泰。

ねの南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは、「あれ見給へ、箱王殿、空を飛ぶ翼も皆別の翼ぞまじへざりける。五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらむ。ものいはぬ鳥類すらかくの如し。われらは人倫に生れながら、和殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。われらが父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしますさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなむ。われわれより幼き者にて、馬鞍、弓矢をもて物を射ありく事の羨ましきよ。これらの事ども思ひ續くれば、いつより今宵は父御前の戀しくおはしますぞや」とて、袖に顔をさし



入れてさめざめと泣きければ、弟もござかしく顔をあはせて泣きあたり。一萬の乳母の女房これを聞きて、あなあさまし、人もこそ聞け。いかに和上臈達、夜も更けぬるに、などさやうにてはおはするぞ。とくとく入らせ給へ。」と、怖ろしげにいひければ、二人のものは門外に逃でて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りけり。

その後は、二人の者どもわが身の程を知りぬれば、世になき父を慕ひつつ、語りあはするまではなけれども、ただ目ばかりを見あはせて、互に袖をぞぬらしける。未だ十歳にも満たざるに、あはれは深く思ひ知りけり。

或時兄弟の、竹の小弓に薄矧うすきのは小矢を取りそへて、遠侍に

出でて遊びけるが、明障子のありけるに、二人立向ひ、あなたこなたへ射通して、一萬箱王に申しけるは、「我等もいつか成長し、和殿十三、われは十五にだにもなるならば、如何ならむ野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如くさしあひて射取りて、とにもかくにもなりなむ。和殿も弓よく射習ひ給へ。われも射習はむ。弓矢は男の一の能にあるなるぞ。」といひければ、弟もうなづきて領掌しけり。年ばへには怖ろしきことかなと、人人思ひけり。

一萬が乳母この由を聞知りて、大きに驚きて、母にかくと申しければ、母も大きに仰天し、二人の子供を呼寄せ、泣く泣く語られけるは、「實か、おのれ等がさも怖ろしき謀叛を起さ



伊藤祐親、  
祐親の女の生み  
し若君。  
伊豆國田方郡伊  
東にあり。

治承四年八月相  
模國足柄下郡石  
橋山の戦。  
同郡石橋山の南  
にあり。

むと議しあふなるは、もし人の耳に入りなばよかるべきか。  
おのれ等が祖父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を  
松河が淵に沈め奉りし故に、御敵となつて、先年伊東の館に  
おいて失はれ給ひぬ。おのれ等かかる謀叛人の孫なれば、敵  
左衛門尉上の御敵に申しなして失はるべし。その時、千度百  
度悲しむともかなふべきか。そのうへ、汝等が鎌倉殿へ召さ  
れし時も、曾我殿歎き申してとどまりたり。その故は鎌倉殿  
石橋山の合戦に打負けて、土肥の杉山へ入らせ給ひし時、梶  
原景時と曾我殿と二人、心をあはせて助け奉りし故に、駿河  
國八郡の大名になされし、その御恩を皆返し進らせて、二人  
の幼き者どもを助けて給はらむと申されければ、鎌倉殿憐

ませ給ひて、それ程の志ならば二人の子供祐信に預くるぞ。  
と仰せられける故にこそ、汝等も安穩にて、今まで希有の命  
を保ちたるぞ。それにつきても、曾我殿の芳恩をば生生世世  
にも報じ盡すべきか。鳥類畜類にても恩を知るところ聞け、  
況や汝等人倫に於てをや。然るを卻て曾我殿に歎を與へむ  
事、返す返すも口惜しかるべし。その恩を報ぜむと思はば、速  
かに謀叛を止むべしと、口説きたてて誡められければ、二人  
の子供目と目とを見あはせ、顔打赤めて立ちにけり。

それより後は、人の聞かぬところにては内内談議しけれ  
ども、人目に顯れては語り合ふこともなし。母も内内怖ろし  
き者どもの心ざまかなと思はれければ、弟の箱王をば出家



にせむとぞ思はれける。(曾我物語)

修訂新撰國語讀本卷五終

大正三年十二月四日 改訂再版印刷  
 大正三年十二月七日 改訂再版發行  
 大正六年十月二十三日 修訂印刷  
 大正六年十月二十八日 修訂發行  
 大正七年一月十日 修訂再版印刷  
 大正七年一月十四日 修訂再版發行

訂修 新撰國語讀本(全十册)	定價	大正七年七月	定價
卷一、二 各金參拾六錢	卷一、二 各金四拾壹錢	卷三、四 各金參拾壹錢	卷三、四 各金參拾六錢
卷三、四 各金參拾壹錢	卷三、四 各金參拾六錢	卷五より各金貳拾九錢	卷五より各金參拾參錢
卷五より各金貳拾九錢	卷五より各金參拾參錢		

著者 佐々政一

發行者 東京市神田區錦町一丁目十番地

株式會社 明治書院

取締役社長 三樹一平

東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷者 島連太郎



發行所

東京市神田區錦町一丁目  
振替口座東京四九九一番

株式會社 明治書院

長電話本局二三九八番



